
どうやら、色々混じったようです。

緋月†

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どうやら、色々混じったようです。

【Nコード】

N0933U

【作者名】

緋月十

【あらすじ】

下手したら誰よりもアレな主人公が、時にからかったりからかったりからかったりからかわれたりしながら、幻想の郷で動き回るお話です。

稀にシリアスが発生する予定ですが、予定は未定なので案外軽く終わるかも知れません。

とりあえず銀狐が登場する作品が書きたかったんです、後悔はそれほどしていません。

さて、それでは幻想のような物語のはじまりはじまりー。

銀狐プロフィール ― 6尾の段階― (前書き)

幻想郷縁起風に銀狐のプロフィールを書いてみました。
予想以上に好き勝手書いてたら長くなってしまいました。
おかしいな、こんなハズじゃなかったんだけど？

銀狐プロフィール ― 6尾の段階 ―

悠久を化かす銀狐^{ぎんぎつね}

銀狐 ― G i n k o

能力…『模倣を司る程度の能力』、『状況が慣れる程度の能力』

種族…妖怪／天狐（＊1）／人間（一部記憶のみ）

危険度…極低（条件付高）（＊2）

人間友好度…普通～高

主な活動場所…幻想郷内全て

銀色の髪に金色の獣の瞳、そして九本の尻尾を持つ人妖。
常に黒い着流しを着ているが、しっかりと尻尾の位置には尻尾用の
穴がありそこから尻尾を外に出している。

基本的にこれといった特定の活動場所を持たず、悠々自適と言わん
ばかりに何処へでも現れる。人里にも出現することがあり、その時
には豆腐屋での目撃が多い。（＊3）

正確は温厚であり、こちらから手を出さない限り相手は何もしてこない。

また止むを得ず攻撃を仕掛けたとしても、大半は避けるなどして手を出してくる事は非常に稀である。だが一定条件を越える、もしくは彼の逆鱗に触れると手痛い反撃が来る。(＊4)

狐が千年生きると天狐と呼ばれる神獣と成り、三千年生きることによって妖力の最上位である空狐と成ると言われているが、銀狐の都合は三千年は軽く通り越しているらしい。本人曰く途中で忘れたと言っているが、出会った時からすでに空狐であった為にその時点で三千年は経過しているのは間違いない。

彼の能力である『模倣を司る程度の能力』だが、簡単に言ってしまうえば相手の能力を真似してしまう能力である。可視不可視に関わらず、彼の前で能力を使用した場合その能力は模倣されていると考えてもいい。その後は妖力にモノを言わせて自由に模倣した能力の使用が可能となる。

もう一つの能力に関しては、不条理と言うしかない。

彼がそう言うものだとなんて納得してしまえば、例えソレがどんなに理不尽だったとしても気付けば納得してしまうという。彼が黒と言えれば白も黒となる、極端に言ってしまうえばそう言うことだという。さらに迷惑な事にこの能力は常時発動しているような状態の為、周囲は否応無しに能力の影響を受ける。(＊5)

（ 目撃証言 ）

・油揚げを上げたら、喜んで尻尾を振ってくれてたよ。お礼に尻尾を触らせてくれたんだ。（＊6）

（人里の豆腐屋の子供）

例外なく、狐は油揚げが好物らしい。

・私が本気になっても打ち負かすだけの馬鹿妖力があるわ。
（太陽の畑の妖怪）

力押しの勝負でも戦える実力があるようだ。

・あの油揚げは素晴らしいものだ……
（妖怪の賢者の式）

どうやら、自前で油揚げを所持しているらしい。

・いろいろお世話になってしまったわ。
（完全に瀟洒なメイド）

どうやら、あの悪魔の居城で何かをしたらしい。

・普通に話をしてるだけでも化かされてるんじゃないかって思うわ。
（妖怪の賢者）

妖怪の賢者と呼ばれている存在でも、悠久を生きた神獣は扱い辛いようだ。

） 対策 ）

基本的に彼から攻撃してくる事はなく、前述の通りに友好度も高い為に闘いをけしかけたりしなければ問題はない。むしろお茶などに誘うと喜んで付いてくるだろう。

万が一彼が怒り状態で現れたとしたら、油揚げを差し出すと助かる可能性は高い。

（＊1）三千年以上生きている為に空狐と成ってはいるが、狐として位の最上位が天狐である為に天狐と記述してある。

（＊2）万が一敵対した場合は、悠久を生きた大妖怪としての妖力と能力で圧倒的強さになる。

（＊3）どうやら、自分の理想の油揚げを作る為に、豆腐屋と協力しているようだ。

（＊4）自慢の尻尾を汚す、油揚げを貶す、彼の堪忍袋の限界まで執拗な攻撃を加える等、滅多なことでは条件に触れないが、油揚げだけは中でも達成難度が低いため注意が必要。

（＊5）例として挙げるならば、自身の能力と同じ物を使われても彼だから仕方が無いと感じてしまう等理不尽すぎる能力である。

（＊6）どうやら、彼の九尾は自慢の一品らしい。私も触らせてもらったが納得するだけの物はある。

銀狐プロフィール ― 6尾の段階― (後書き)

こんな感じの現状での銀狐のプロフィールでした。

話が進めばまたちよこちよこ修正を加えていくかもしれません。

っていうか、正直に言うともっといろいろ書き込みたかったんですが、長くなりすぎてる気がするんですよ。

まあ、いずれ開き直って書くんでしょうけど。

第一尾 どうやら、違う世界に来たようです。(前書き)

まずは、最初にアクセスしてくださりありがとうございます。御座います。

この作品は緋月十が、思いつきとノリと勢いで書き始めた物になります。

故に東方はカジリ程度には知っていますが、深くは知りません。

また、オリジナル主人公がどうこう動きますので、本編等とはかけ離れた内容になると思われます。

そういった面を許容できない方、またはキャラや世界観を大事にする方にはどうなのでしょう？となる可能性がありますのでご注意ください。

そんな諸々の事情を許容して頂き、読んでくださる方の暇つぶしになればと思います。

それでは、緋月十が描く不思議で不可思議で理不尽な東方ワールドをご覧くださいませ。

第一尾 どうやら、違う世界に来たようです。

目が覚めたら……

「……え？」

何か知らない森の中にいました。

第一尾

どうやら、違う世界に来たようです。

「…………まあ、そういうこともありますか」
「…………っ!..?」

とりあえず、慌てふためいても仕方が無いのでそう言葉を区切っておきます。

昔から、親しい野郎どもにはお前の適応力は高すぎだと突っ込まれたりした事もありますし。

でもまあ、普通の精神状態から考えると、ここは慌てふためいたり現状の把握に努めようとするんでしょね。

俺もこういった性格じゃなかったら、同じような事をしていたはずですし。

「で、そこで妙な所からずり落ちてる綺麗だけど胡散臭いお姉さんはダレですか？」

特に深く考えてない発言と同時に、後ろからそれはもう漫画とかでしか聞いた事のないズベシャっていう音が聞こえてきました。

その方向に視線を向けてみれば、金糸の如き綺麗な髪と全体的に紫色の服を着た女性が、空間の割れ目とも言えるようなところから半身を地面の方へ横たえていますね。

……なんか目っぼいのが見えたりしましたけど、なんなんでしょうね、あの割れ目？

「……貴方、普通なら自分がどうなったのか、とか私が出てきているスキマはなんなのか聞くところじゃない？　っていうか胡散臭いって初対面の相手に失礼じゃないかしら？」

「ああ……スキマですか、確かにその割れ目ってなんかスキマっぽいですね」

言われて見れば、確かにスキマって感じがしますし。
でも、少なくともボクの知っているスキマは、あんな気持ち悪い目がある空間ではないハズなんですが。

「私の話、聞いてたかしら？」

「ええまあ、話し半分以下には。とりあえず自己紹介でも……と思っただんですが、ボクはダレですかね？」

親しい友人がいたような記憶もあれば、自分が何処かで住んで暮らしていた記憶があります。

だが、肝心な自分の名前という所だけ、いまいち霞がかかったかのように思い出すことが出来ません。

……ボクの名前は■■■■である、こんな感じで何故か名前だけが出てこないんですよね。

「それを、私に聞いて答えが返って来ると微塵も思っていないように見えるけれど？」

「そうですね、ありえない話で貴方がストーカーとかの類で、ボクが頭を強打されて拉致されて来た。なんて事でもない限りは無理でしょうね」

「ストーカーって……」

ボクが名前を失う前のボク……めんどくさいので『オレ』とでも仮定しましょうか。

そんな『オレ』の交友関係はそこまで広がったとは思えず、またこんな妙に胡散臭い笑みを浮かべるような美人にあった記憶もない。と、なるとボクがこの女性に会った事はないと仮定しておいても問題ないでしょう。

「とりあえず、現状を何一つ理解出来ていないボクよりも、貴女の方が詳しそうですね？」

何故か森の中にいるボクと、偶然で無ければこんな所に【意図的に】来たように見える女性。

どっちが現状を正しく把握しているかなんて子供でもわかるような状況でしょう。

例えその女性が、先ほどから多少引きつってはいるものの、まるで全て自分の手の内であるというような胡散臭い表情をしていたとしても。

ボクの中で取れる選択肢というのはそう多いわけでもありませんし。

「と、言うわけなので一先ず貴女の名前を聞いてもいいですかね、いつまでも固有名詞ではない呼び方を続けるのは失礼でしょうし？」
「いろいろと失礼なことを言われた気がするし、頭の中でも何か考えてそうだけど……」

どうやら、頭の中で胡散臭いと連呼したのがバレかけているようです。

表情には出さず、視線だけで留めていたつもりだったんですが、やはり目は口ほどに物を言うのですね。

「まあいいわ、その追求は後でするとして」
「あ、結局追求はされるんですねー？」

どうせなら流してくれても問題ないんですけど。
案外根に持たれているのかも知れません。
まあ、追求されたとしてもなんとかなるでしょう、幸いにして頭は
通常通りに廻っていますし、この女性と短い会話をしてみた感想に
なりますが、御し易しとは言いませんが話して解らない相手でもな
さそうです。

「名も知らぬ貴方へ、ようこそ幻想郷へ。私、八雲 紫が歓迎する
わ」
「……………」

これまた、聞き覚えのないような、あるような微妙な単語が出てき
ましたね。

—————幻想郷、そして八雲 紫。

これは、確かボクがまだ『オレ』であった時に聞いた記憶がありま
す。

確か……超ムズい弾幕シューティングだったような記憶が。

数回試しにと遊んだ記憶がありますが、画面いっぱい広がる敵の弾をどうやって避けるのかと突っ込んだ記憶です。

そんな時に友人が、目の前の女性【八雲 紫】という存在に関してナニかを言っていたような……

「確か、ゆかりんはあはあ……でしたか？」

「……あ、貴方は何を言っているのかしら？」

「ああ、失礼。少ない記憶にある友人の言葉を思い出していただけですよ」

つつい、考えていた事を口に出した瞬間、八雲さんは若干引きつっていた笑顔をさらに引きつらせてみせた。

そういえば、友人のその台詞を聞いたもう一人も似たような表情をしていた気がします。

ボクはどうでもいいので流していましたけど。

「さて、八雲さん。自己紹介していただいて申し訳ないんですが、どうやらボクは名前が思い出せないらしいので」

相手を知ったが、自分がワカラナイ。

礼儀として自己紹介を返したい所ですが、どうやらそれは難しいようです。

「という訳で、一時的にナナシとでも呼んでいただければ」

名前が無いから名無し、でも漢字で書かれると悲しいからカタカナでナナシ。

ある意味最低とも言える自己紹介ですが、まあワカラナイものはワカラナイので許していただくとしましょう。

「……幻想郷に来て、変化したのかしら？それにしても妖力が大妖怪並だけど？」

「妖力、それに大妖怪……ですか、それってあの物語とかに出てくる妖怪とかですか？」

「でも、ここに幻想郷に来たという以上は素養はあったってことでしょうし」

八雲さんが何かを呟くようにして言っていますが、どうやら自己に埋没しているらしくボクの問いかけは虚しく流されてしまいました。さて……この場をどうしたものか。

このまま放置して去ってしまうというのも折角こんな森の中で出会えた唯一の人？に悪いですし。

「さて、どうしたものでしょうか」

「それにしては、妙な変化ね……いっそ転生って言った方が説明がつきそうだけど」

八雲さんが戻ってきてくれるまで周りを見渡して見て、服装は『オレ』の記憶にある変哲も無い黒の着流し。

まず着流しの時点で普通か？と問われそうですが、どうにも洋服よりは和服の方が好きだったというだけ。
別にそれで外出したりしてる訳じゃなかったからそこは気にしないで頂きましょう。

「……ん、これは？」

服装が記憶にある通りだと思っていたボクの視界に見慣れない物が映りました。

先端が白くその他は黄金色で、妙に手触りの良さそうで、さらに言うなら毛並みも中々に見える。そんなどう見ても狐っぽい大きめの尻尾。

それが後ろの方へ首を回したボクの視界にあります。

ついでに言うと、それは一本だけでなく複数本。

「いち、にーい、さーん……全部で九本ですか」

不思議な事に、数えようとしたらその尻尾はボクの意味を汲み取ったのかのように動いて数えやすくしてくれました。

どうやら、俗に言う九尾。

どっかの漫画とかで在りそうな九本の尻尾がついています……何故か、ボクのお尻辺りに。

付け根の辺りに触れてみれば、どうにも着流しにはチョウドイイ穴があり完全にボクと尻尾は繋がってますね。

「おお、これボクのですか!？」

数えてる時点で気づけよと言われそうですが、あまりにも違和感が無かった為に気付かせませんでした。

改めて認識してみると、確かに動かそうと思えば自分の意思の通りに動きますね。

でも、一本一本が大きいから、全部動かすとそれはもう凄いです。こう、ワッサワッサって感じで。

「……貴方は、何をしているのかしら？」

「え？　とりあえず自分の状態の確認ですかね？」

相変わらず、尻尾をワッサワサと動かしつつ、漸くコチラへと意識を戻してくれた八雲さんに答えます。

と、いかナンドスカその手は、妙にワキワキ動かしてまるで獲物を狙う猫科の動物のようなんですが。

っていか目線がボクの尻尾に釘付けなんですけど、見ないでくださいよ、恥ずかしいじゃないですか。

「ひとまず、こうしていても埒が明かないから私の住处へ案内しようと思うのだけど？」

「そうですね、さすがに森の中でのサバイバル生活が出来ないとは言いませんが、食料の調達とかに難がありそうですし」

流石に食べれる植物がどれかも解りませんし、この人の手が入った

形跡の無い森の中が安全とも到底思えませんね。
そうすると、八雲さんの提案は受ける事はあれど拒否する事は無いでしょう。

「で、移動手段は徒歩ですか、もしくは乗り物でもあるんですか？」

八雲さんの周りをそれとなく見回しながら問いかけると、何時の間にかボクの身体はよくワカラナイ紐のようなもので簀巻き状態にされていました。

……あれ、どこから出したんでしょう、この紐？

「詳しい話は後で、まずはここから移動するわよ」

元から逃げる気はさらさらないが、何故か縛られているボクと、その紐の先を持つ八雲さん。

そして、八雲さんが片手を振るような動作をすると、その先の空間が割れました。

ああ、そういえば八雲さんが出てきた時もこんなようなスキマがあったなあ……

「まさかとは思いつつ、ほぼ確信を持って問いますけど、移動手段ってソレですか？」

「他に移動手段が貴方にあるのならそれでもいいけど、ここら辺の地理なんてわからないでしょう？」

「ええ、まあ自分すら解っていない人間に、ソレを問うのもどうか

と思いますが」

「人間……ね、その所も私の住処【マヨヒガ】に着いたら説明してあげますわ」

ボクの一言に思うところがあるのか、八雲さんは一瞬含みを持たせた台詞と共にスキマへと体を滑り込ませました。

当然、彼女の持つ紐が未だボクの身体に巻きついているという事は必然的に。

「わぁ、気持ち悪い」

「棒読みもいい所ね」

「割と本心なんですけどね？」

ボクもまた、引き込まれるかのようにその君の悪い目が浮いているスキマへと突撃する事になりました。

うーん、なんていうか気持ち悪いとしか表現できない移動手段です。大した驚きも見せないボクに、八雲さんは胡散臭そうな笑顔を維持していました。ボクは流れに身を任せとりあえず目を瞑る事で視界を閉ざすことにしました。

さすがに、ぎょろりとこちらを向いてくる目を直視し続けるほど豪胆なつもりもありませんので。

なにわともあれ

「……失礼ですが、コスプレですか？」

辿り着いた先、確か八雲さんが言うには【マヨヒガ】でしたか？に、辿り着いたボクが最初に見たのは、ボクと同じく九尾を背負い、中華風な服を着た女性でした。

八雲さんの服は、まあ百歩譲って普段着で着ている人がいたとして、さすがにここまであからさまな格好をされているとついつい言ってしまうのも仕方がないでしょう。

「紫様、この失礼な男は一体……？」
「迷い人……外来人だと思うのだけど、存在が妙だから拾ってきたの」

ボクの質問には答えてもらえず、尻尾の女性はボクを見て八雲さんと話を始めてしまいました。
額によくよく見れば、コミカルな井形が浮かんでいるように見えるのは気のせいですよね、きっと。

「外来人ですか……？ それにしては妙に強い妖力と、どうみても妖怪ですが……」

「そこが妙なのよ、どうにも話してみると彼は【人間】であつたような風に話す訳だし」

「【人間】ですか、どう見ても私と同種族ですが」

先ほどから、どうやらボクは人間じゃないというよくワカラナイ疑いを持たれているらしい。

まあ、確かに自分の意思で動く尻尾がついている以上コスプレという訳でもないかも知れませんが。

でも、自分としては一応人間のつもりなので、訂正は入れておいた方がいいかもしれないですね。

「それでも、ボクは間違いなく【人間】だと思うんですけどね？」

「……：そういえば貴方、自分の確認とか言っていたけど、顔とかを見ただけじゃなかったわね」

「そうですね、流石に鏡なんて所持していませんでしたし、それ以外で自分の顔を見れるような場所でもなかったですし」

まあ、森の中に鏡があったらそれはそれでおかしいと思いますけど

ね？

そんな事を思っていると、八雲さんは再びスキマを作り出し、そこから手鏡を取り出して渡してくれました。

まるで便利な道具入れですね……昔見た某未来型青狸のポケットみたいなの。

「……で、この鏡は別の世界を映し出すなんてそんなSFな手鏡ですか？」

映っているのは、銀の髪に黄金色の獣の瞳で、頭に黄金色の耳をつけた見覚えのない顔がありました。

自慢になりませんが、記憶の中の『オレ』は人並みの容姿でしたし……黒髪黒目の典型的日本人だったと思うんですが。

若干悔しいことに、手鏡に映る顔は雑誌で見かける男性モデル並に整っていますし……

「現実逃避か、素で言っているのか解らないけどソレに映っているのはナナシ、貴方自身よ？」

「はー、そうなんですか……所でこれは夢か何かですかね」

髪と耳はまあ、ここまで綺麗にできるかはワカリマセンが染めてしまうのと付けられようにはかなりますが……

さすがに目の色と瞳孔が違っているのは移植でもない限り不可能ですよ。

「残念かどうかはわからないけれど、コレは紛れも無い現実よ」

「……そうですか、所でお隣の方が同種族と言っていましたか、貴女は？」

いろいろと飲み込みきれない事態になってきているような気がしますが……

とりあえず得られるだけの知識は得てしまおうと思い直し、先ほど藍と呼ばれていた女性に声をかける。

「ん、ああ……私は八雲 藍。紫様の式だ」

「どうも、名前がワカラナイのでナナシと仮称しています。それにしても『シキ』……ですか？」

「そうね……貴方なら昔の陰陽師が使っていた式神と言えば通じるかしら？」

「なるほど、その『式』ですか」

確か、何か力を術者と言われる陰陽師から貰って動く何かでしたか。別にそういうのに詳しい訳ではないので細かい原理なんかは知りませんが。

まあ、ご時世がご時世でしたし、そういう話題も友人から聞いたことがありますね。

「と、なると同種族という事は私もダレかの『式』ということですか？」

そうすると、ボクにも誰か陰陽師的な術者。
詰まる所の主的な人がいるんでしょうか？
っていうか、人間が人間を使役するって事ですかね？

「いや、それは私が式になる前の種族で、妖狐と呼ばれていたな」
「妖狐ですか……ああああアアああアアっ!？」

「え、ちよつとナナシ!？」

藍さんから出てきた『妖狐』という単語。

それを呟いた瞬間、膨大な量とも思える情報が一気に頭の中に流れ込んできました。

『オレ』であつた頃に生きてきた数十年。

ボクがボクになる前に生きてきた『妖狐』としての数千年の記憶が。

「グッ……ガああアアああアアっ!?!?」

未だ『オレ』でありボクであるこの身には、平然と耐え切れるハズのない情報の渦が滂沱の如く脳を、記憶野を、存在を潰していく。記憶にある数十年はまだしも、記憶にすら存在していなかった数千年を生きてきた『妖狐』が生きてきた記憶、想い出。そんな量の情報が、タダの人であつたボクを容赦なく攻め続ける。

「……そういうこと……ですか」

「ナナシ!しっかりしなさい!! 藍、急いで休ませる所を用意して
!!」

「はい！」

ボクがダレなのか、そしてここがどこなのか。
そして、何故ココにいるのか。

「（ああ、起きたら改めて自己紹介をしなきゃいけませんね……）」

全てを理解し全てを把握した時、今まで襲っていた情報の渦は止まり数少ない結論を得ると共に、ボクの意識はブレーカーが落ちるように暗闇に閉ざされる事になりました。

八雲さん達の慌しい声を聞きながら、確実に目覚め起きた時の心配をしながら。

改めて生まれた『ボク』という存在は、こうしてその日を終えました。

第一尾 どうやら、違う世界に来たようです。（後書き）

さて、第一尾いかがでしたでしょうか。

未だ主人公となる人物の名前や特徴などがほとんど書かれていませんが。

さらに言うに出てきたのも紫と藍くらいですし。

次で、主人公の名前とか能力とか書けたらいいなあと思います。

割と亀更新になるかもしれませんが、少しでも楽しんでいただけるように頑張る所存ですので、どうぞ長い目でお付き合いください。

誤字脱字、こうしたらいいよーというご意見がありましたらどうぞご一報ください。

まだまだ未熟な自分ですが真摯に受け止めさせていただきますので。

ちなみに、見た目で緋月十は藍が好きです。

いいですよ、狐の尻尾。あのモフりたい気持ちを理解していただける方は多いと思います。

でも、自分に付くのは別にいいですね。人（美人）についてるのをモフりたい。

第二尾 どうやら、説明が必要なようです

目が覚めたら……

「……ん」

見覚えの無い天井を見上げていました。

御機嫌よう、ボクです。

気を失う前のあの死にたくなるような頭痛はすっかりと回復したみたいです。

なんと言いましようか、大きな本棚が頭の中に出来上がった感じがですね。

必要な知識を考えれば、自然と検索がかけられ引っ張り出してきてくれるという状態みたいです。

身体を起こしながら変な状態が無い事を確認しつつ、意識を失う前の事を思い出します。

「そういえば、八雲さん達にご迷惑をかけてしまいましたね……」

さすがに、あの状況で周りに迷惑をかけない気遣いなんてする余裕は無かったですし……

あのまま放置されてないという事は、お二人には介抱やらナニやらを頼ってしまいましたね。

あ、一応ボクの為に言っておきますが服は着流しのままなので、脱がされたり着替えさせられたりはしてないみたいです。

「ん、目覚めたのか。調子はどうだ？」

「ああ、どうも八雲さんの式さん。おかげさまで良好かはわかりませんが回復したみたいです」

寝起き特有の倦怠感がまだ多少なりとも頭の中に残っていますが、頭を振る事でそれを払う。

看病の恩人とも言える方ですから、出来るだけ頭が正常に廻るようにならないといけませんからね。

それに、これから『ボク』という存在を詳しく八雲さん達に説明もしなくてはなりません。

「私の事は藍でいい。その名前だと言うのがいちいち面倒だろう」
「わかりました、それでは藍さんと呼ばせていただきますでしょう」

正直、勝手に呼んでいいのか悩んでいた所だったので、藍さんの提案は受ける事はあれ拒否する必要はないものでした。

ああ、そういえば……記憶の整理が終わったので、アレが出来るようになったのでした。

一先ず、お試しがてら色々やってみましょうか。

「……よいしょっと」

「なっ!？」

ズルリと、ボクが片手で撫でた空間が歪み、裂けました。

ああ、やっぱり出来るみたいですね、紫さんが使ってたあの割れ目。

「えーっと……どこにあったかな。ああ、これですこれです」

手を突っ込んで、中を漁ってみると案外簡単に要望の物が出てきました。

何故ソレを出そうと思ったかは後で説明するとして……

今はただこの名品に共感を持って頂けそうな藍さんに見せる事が大事です。

「そ、それは……まさか」

「ええ、見ての通り油揚げ。狐の大好物とされる油揚げですよー」

取り出したのは油揚げ、それもカナリの一品と自信を持って言える品です。

濃厚であり、しかし反面口に含めば油でベタベタしたような感じは

なく、さらに一口かめば涎が滝のように流れ出るんです。

「……………」

「……………」

藍さんの目が、ボクの手にある油揚げに注がれるので、つつい手を動かして見たくなりました。

上へ下へ、左へ右へ、それを追いかけるように藍さんの首は動き、視線は釘付けとなっています。

さらにちよつと後方へ視線を移せば、そこにはボクと同じ九尾がそれはもう勢いよく振られています。ああ、いまいち自覚していませんでしたけど、背中に当たる感覚からボクの九尾も似たような動きをしてるんでしょうねえ……

「……看病のお礼もしてませんし、お一ついかがですか？」

ちよつとした余談になりますが、狐の好物が油揚げというのも、一応由来的なモノは存在するんです。

まあ、詳しく語ってもいいんですけど長くなるだけですし簡単に言ってしまうんですけど。

簡単に言えば、ジャツカルの眷属、日本では狐の眷属とされている茶枳尼天への貢物として仏教に取り入れられた際に、ネズミのフライが大豆で代用されたのです。

故に、狐の好物は大豆のフライ……詰まる所油揚げとなったってのが由来らしいです。

まあ、かなり端折って説明したんで、詳しく知りたい方はそういっ

た専門の方に聞いてください。これ以上はメンドクサイです。

「い、いいのか!？」

「はい、在庫と言いますかまだ残ってますし？」

すでに先ほど開いていたスキマは閉じてますが、手を入れた感覚からするとまだまだ貯蔵されているようです。よっぽどボクになる前の『妖怪のボク』は油揚げ集めに熱を注いでいたらしいですね。

「どうせならと思いますし、一緒に食べましょうか」

「ああ、ならありがたく……っ！」

藍さんが渡した油揚げに一口噛み付くと、目を見開いて、尻尾は天を突くくらいピンと張りました。

あれ……味が合わなかったんでしょうか？

それとも無いとは思いますが、悪くなったりしてしまったのでしょうかね？

「あむ……うん、美味しいですね」

悪いものを渡してしまっていたら悪いなと思い、自分も同じものを食べてみます。

ですが、記憶にある通りの濃厚かつ、口当たりのいい感覚が広がります。

美味しいと思うんですが……もしかして味覚の違いから口に合わなかったんでしょうか？

「お、美味しい……こんな美味しい油揚げなんて人里じゃ手に入らない」

「あ、良かった。悪くなってた訳じゃないんですね」

割と長い時間咀嚼していたかと思えば、飲み込んだ後に出てきた台詞はソレでした。

どうやら、予想以上に美味すぎて思考が止まっていたらしいです。やあ、本当にその人に合った美味しいものを食べると口が止まると聞いた記憶がありますが、実際にそういうことってあるんですね……

「うまうま……も一ついかがですか？」

「……いただきます」

ここまで喜んでもらったのが嬉しくて、ついついもう一つ出して藍さんに差し出してしまったとしても問題ないでしょう。

同時にボク用にももう一つ取り出して、二人して特に何を話すでもなく油揚げを食べるという妙な空間が出来上がっていたとしても後悔は微塵も感じません。

だってボク、狐ですから。

「……貴方達は何をしているのかしら？」

「見ての通り、油揚げの友を見つけましたので、喜びを分かち合っています?」

「なんで最後が疑問系なのか聞いてもいいかしら?」

なんと言いますか、マトモに自己紹介も出来ていませんし、してませんし。

そんなボクと藍さんに友情が結ばれているかと聞かれれば首を傾げざるを得ないでしょう。

油揚げという共通のモノは出来ましたが、例え無関係であれど同じモノを食べるくらい在り得るんですから。

そう言う意思を込めて、どこのスキマから現れたのか解らない紫さんへと視線を向けます。

「はあ……まあいいけど。それで、貴方は大丈夫なのかしら?」

「はい、ご迷惑をお掛けしました。もう平気です」

片手を額につけて、まだ何やら言いたそうな雰囲気を出していましたが、一先ず追求は後回しにしたい事にくれたようです。

そうしていただけると、話が進みやすくてコチラとしても助かるので深くは突っ込みませんけどね。

「もぐもぐ……ん、改めまして紫さん、藍さん。ボクを助けてくれてありがとうございます」

食べかけだった油揚げを一気に咀嚼しきると、ボクは頭を下げまし

た。

当然、身体を起こした状態からではなく、改めて正座をし直してです。

身体の調子も大して悪くないのに、そのまま頭を下げるだけなんて礼儀がなっていない性格ではないつもりですからね。

「正式な自己紹介をさせていただくと、ボクの名前は『銀狐^{ギンコ}』見ての通り九尾の狐です」

まあ、巷では妖狐だの天狐だの空狐だの呼ばれてた記憶もあります
が……

狐が千年生きれば天狐で、三千年を越えれば空狐とか言われるらしいです。

「一応これでも数千年を生きた妖怪らしいので、ちょっとした能力は使えます」

「な、私より長生きしているのか!？」

「数千年って、下手したら私が生まれた時よりも前じゃない……」

軽く三千年を越えてるボクは一応分類上では空狐となるんですが、ボクとしては天狐、空狐より銀狐の方が性に合ってたので、それを名前にしてます。

分類なんてしたい人がすればいいんです、大事なのはボク自身がどれを名前にするかが重要なんですから。

「能力に関してはそうですね……幻想郷風に言うのであれば『模倣を司る程度の能力』とでも言いましょうか？」

「模倣……つまり先ほど使った紫様のスキマのような能力も」

「ええ、見せていただいた紫さんの能力を『模倣^{マネ}』したモノです」

昔の言葉で狐に化かされたというのがありますが、その応用力が馬鹿みたいに効く能力と考えてもらうといいかも知れません。相手が使った能力をそっくりそのままと言っていくくらい使えるんですから、化かされたと思う人だっているでしょうし？

現にボクが紫さんの能力を使って見せた時、藍さんは驚いたような化かされたような表情をしたんですから。

……油揚げを出したのは趣味です、というかボクの大事な食料です。そこは気にしないでください。

「まあ、それは銀狐としての名前と能力なんで、もう一つの方もご紹介しましょう」

「もう一つ……ってどういうことかしら？」

ボクの中には、記憶が二種類存在しています。

妖狐であったボクと、もう一つの『オレ』という数十年を過ごした人間としての記憶です。

そのお陰で記憶の統合というか、妙な違和感を大量に感じていたわけなんですけどね。

「ボクのもう一つの名前は【白銀^{しろがね} 狐矢^{きつねや}】 まあ妙な名前ですけど気にしないでください」

「なるほど……貴方が人間であるように話していた原因がその記憶という訳ね」

「はい、そしてその記憶の方にも何故か能力が付いていたらしいんですよね」

その能力と言うのが、また幻想郷風に言うと『状況が慣れる程度の能力』

ここで不思議なのが、状況『に』慣れるではなく、状況『が』慣れるという点だったりします。

決して誤字だったり、間違えてたりする訳じゃないんですよ？

「……つまり、周りが多少不条理だとしても、貴方が『こういうものだ』と思えば、結局周りもそう感じてしまうって事かしら？」

「聡明ですねえ、紫さんって。ぶっちゃけてしまえばその通りです」

なにやら——九尾としての自信が——とか——これでも最上位の妖狐だったのに——とか呟いてる藍さんを放置して、紫さんと話を続けていきます。

理解が早いのか、それともまた別の何かか。紫さんは面白いくらいにボクの話を理解し、付いてきてくれるのでこちらとしても話やすくて助かりますね。

「そう言うわけなので、これからはナナシ改め銀狐とでも呼んでください」

「人間の時の名前はいいのかしら？」

「まあ、そっちの方にも銀狐と付いてますし、ボクとしては生きた年代が違いすぎて、長い方に合わせた方が楽ですから」

この身体の基本として、どうやら銀狐の方が強く出ているようですし、記憶こそ『オレ』であった時のモノが多いですが、生きた年代を考えれば一時的な物になるでしょう。

統合が最終的に完了してしまえば、両方の知識を引っ張り出す事だって可能でしょうし。

「と、まあボクと言える事はこのくらいですかね」

「そう……じゃあ銀狐、問いましょう。貴方はこれから幻想郷でどう過ごすのかしら？」

表面上は何気ない感じで、でもボクの目に映る紫さんの瞳は有無を言わせぬ迫力をもし出していました。恐らく、ボクの答えによって紫さんはここでボクと敵対することも辞さないと言う強い意思を感じますね。

相変わらず妙に胡散臭いと言うか、もったいない笑顔は健在ですけど。

「そうですねー……」

ボクとしても、幻想郷という世界を把握している訳でもありませんし。

まあ、銀狐としての記憶に要所要所でなにやら思い出のようなもの

もあるので、来たのは初めてという訳じゃ無さそうですが……
改めて考えてみると、ボクが『ボク』になってから特に何をするとか目的もないですね。

「とりあえずは、この幻想郷を廻って見ようかと思えますよ」

記憶にある思い出と、今のボクが感じるモノは別物だと思いますし、はつきり言ってしまうえば記憶は記憶で、はつきりと自覚している今ではボクは初めて幻想郷に来たのと変わりありませんから。

「ですので、紫さんが何を懸念しているかはワカリマセンが、そう言った面倒事は起こす気はありませんので、さりげなく現状復帰してる藍さん。その殺気を抑えてもらえますかね？」

「……そうみたいね、藍。とりあえずは引きなさい」

紫さんの背後で、なにやら妖力を貯めていつでも解放できるようにしている藍さんに笑いかけます。別にコチラとしては争う気も毛頭ないので、貯めただけ妖力の無駄になってますよ？

「紫様には申し訳ないが、何を持ってそれを信じろと？」

紫さんに言われても、引く様子を見せない藍さん。
さて、困りましたねえ……ボクとしては本気でこの幻想郷をどうのこうのする気もないんですが。

信じて貰える為には……

「では、この九尾とボクの名前に誓いましょう。そして……」

真面目な顔を作りながら、ボクとこのモフモフな尻尾。

九尾とは年代を生きた証であり、それに誓うという事はソレを裏切る時は存在自体を否定して構わないと言う強い意思表示になります。さらに、それだけでなく再びスキマを作り出し、そこに手を入れてアレを取り出します。

「この、超美味しい油揚げに誓いましょう!!」

「ちょっと銀狐! 九尾や貴方の名前より誓いに対する比率が随分違うわない!？」

ジャーン、と擬音が聞こえてきそうなくらいに取り出した油揚げを高々と掲げて宣言してみます。

いやあ、この油揚げの良さが解る藍さんですから、これもまた一つの意思表示としては十分効果があるんじゃないかと思っただけですよ。それに、狐としては好物の油揚げに誓うくらい基本じゃないかと思っってますよ、ボクは。

「くっ……その油揚げに誓うのなら……」

「藍!?! 貴方まで油揚げが大事なの!?!」

「何を言うんですか紫様! 狐や妖狐、私にとって油揚げがどれだけ大事なものかご存知でしょう!?!」

ワイワイと、なんでも藍さんは人里という所に油揚げをかうために態々行くんだとか？

それを知らない紫さんがそんな事してたのかと言えば、藍さんが冬眠？してるから知らないだけでしようと反論し。

たまにお金が減ってると思ったらソレに使ってたのか！と紫さんがまた咆えて。

なにやらボクを放置して主従っぽい二人が口喧嘩を始めてしまいました。

「あむあむ……これは、暫く收拾がつかないそうですね」

我関せずとばかりに、誓いの時に取り出した油揚げを食べて喧騒を見ているボク。

正直、ここに居てもなにやら忘れられているような気がしますよね。コレを食べ終わったら、一先ず記憶にもある幻想郷を漫遊でもしてみましようか。

勝手に居なくなるのも失礼ですが、ちよつと紙と筆を拝借して書き置きを残しておけば問題ないでしょうし。

「そうですねえ、ちよつと面白く『探さないでください、旅に出ます』とでもしておきますか」

別にここがボクの家でもなんでもないんですが、こういった書き置きで一度は書いてみたい台詞ですよ、これ。

まあ、探されないとしてもボクが幻想郷にいる間はまた会わない訳でもないでしょうし。
何故かはワカリマセンが、紫さん達にはまたすぐ会えるような気がします。

「と、言うわけですから、お邪魔しましたー」

未だ言い合いを続けている二人を横目に、ボクは再びスキマを広げるとその空間の中へと身体を潜り込ませました。

うわぁ、相変わらず気持ち悪い目ですねえ。

もうちょつと、模倣するにしても精神的に問題ないような模倣を試みたいものです。

「はて、ここはどこでしょうね？」

ペツッと、まるでスキマから吐き出されるように出てきました、ボクです。

どうやら、この『模倣』ボクのイメージが多少なりとも影響されてしまうようです。

紫さんが出てきた時にはそうは思ってたんですが、どうにも出てくる時、吐き出されるというか弾き出されるというかそんな印象があったもので……

「それにしても、随分と見事な向日葵畑です」

まあ、特に影響ないので問題ないと決め込み、周りに映る光景を見たボクの素直な感想がそれです。

いやあ、ここまでしつかりとした向日葵畑なんて記憶にも早々ありませんが……

まあ、目の前の自然を愛でるのも素晴らしいんですけど、その前に一つ懸念事項と向き合うとしましょうか。

「どうも、唐突にお邪魔しております。この向日葵畑の管理人さんですかね？」

「ええ、始めまして名も知らない侵入者さん」

後ろから、それはもう隠す気がない程の殺気がビンビンとボクに突き刺さってきている訳なんですよね。

これはなんと表現すればいいでしょうか、例えるなら母ライオンが子ライオンに生きた獲物を狩猟させるような……？ いや、これだと正確じゃないですね。

どちらかと言うと、獲物を前にした飢える寸前のケモノと言った感じでしょう。

「そして、さようなら」

いつの間にか、ボクの前まで移動してきていた管理人さんが、その持っていた日傘らしきモノを上段から一気に振り下ろして来ました。マズイですね、コレは当たったら痛いとかいう状態じゃ済まなそうなんですが……

「……妖力の割りに、期待ハズレね」

振り下ろされた日傘に、一刀両断される『ボク』

その威力は、日傘が当たった地面まで碎くくらいの強さでした。

『ボク』が両断されたその姿を目に納め、今まで放っていた殺気を一気に収束させる管理人さん。

そりゃあ、唐突に攻撃してきて、成す術もなく殺されてしまえば攻撃してきた方はそう思うでしょうね。

「いやあ、最近の向日葵畑の管理人さんって物騒と言いますか、パワフルなんですなぁ……」

「っ！ ……貴方、何故生きてるのかしら？」

まあ、所詮痛いとかそう言うのは当たればの話なんですよね？

解りやすい所で残像とかでもいいですが、管理人さんによって真つ二つにされてしまったのは、ボクが妖力で作った幻影だったりします。

「これでも妖狐ですから、幻術等はお手の物って事で説明がつきませんか？」

「そう……なかなか楽しめそうじゃない？」

えー……今引つ込めた殺気がまた出てきているような気がするんですけど。

と、いか別にはボクは闘いに来たとかそう言うわけじゃないんですが、どうやら普通に話しても聞いて頂けなさそうなんですけどー。折角お話を聞いていただく為に、態々思い出したての妖術を使っただけですけどねえ。

「さあ、楽しみましょう?」

「いやー、全力で遠慮させて頂きたいんですけど?」

さて、一先ずこの現状をどうやって打破すべきなのでしょう。何かいい案持つてる人がいたら、是非とも教えていただきたいです。それはもう切に。

ジリジリと間合いを詰めてくる管理人さんから視界を外さないように、ボクはどうしたもんかと頭を捻るしかありませんでした。

第二尾 どうやら、説明が必要なようです（後書き）

さてはて、第二尾いかがでしたでしょうか。

割と設定的な現状説明がメインでした。

ここで漸く主人公となる銀狐の名前が出てくるとか、何考えてるんですかね？

まあ、そこら辺はご愛嬌と置いていただければ。

次に出てくる人？は、皆大好きフラワーマスターのあの方です。

和解するのか、ぼこぼこにされるのか、化かして終わるのか。

それはもう、書いてる時のノリと勢い次第で変わります。

個人的に見た目もそうですが、風見の幽香さんは好きな感じなので悪いようにはしないつもりですが……

はてさて、どうなることやら？

それでは、あとがきもそこそこ次は第三尾でお会いしましょう。

P.S. まさか投稿初日に感想をいただけるとは思ってませんでした。お気に入り登録してくださった方と感想を下さった方に感謝を。

第三尾 どうやら、戦わなくちゃいけないようです

管理人さんと、ボクの間合いは少なく見積もっても五メートル弱。さっきは倍以上あった距離を一瞬で詰めてきたので、恐らくこの距離などソレこそ瞬きする間に詰められてしまうでしょうね。さらには先ほどボクの幻術を真っ二つにした力。純粋な力押しな方なんでしょうか？

「個人的には、平和的に話し合いなんかで落ち着けばと思うんですが、いかがでしょう？」

「そう、それは残念ね。意見は合わないみたいよ？」

紫さんとは違い、人の良さそうな笑顔をしますけど、先ほどから収まる事を知らない殺気がビンビンとボクに当たってる訳で。勝ち負けは二の次で、どうやら管理人さんは戦う事が好きな模様です。

「ボクと争っても面白いとは思えないんですけど……？」

「それを決めるのは私であって、貴方ではないわ」

ブンツと、風を切るような音と同時に、再びボクへと振り下ろされてきた日傘。

それを半ば無意識で後ろに飛ぶ事で辛うじて回避することが出来ました。

うーん……一応目を離したつもりはないんですが、予備動作がほとんど見えないですね。

「逃げるだけじゃつまらないでしょう？反撃くらいしてみなさい」

そう言いつつも、まるで重みがないかのように日傘を連続で振ってくる管理人さん。

最初と比べるとある程度は見えるんですが、ボクとしては戦う気はまったくないんですけど。

そう言った所で、この管理人さんが止めてくれるとも思えませんし

……

こうなったら、疲れてもらえるくらい避けるに徹するしかないでしょうか？

「考え事するなんて、随分と余裕ね？」

「……っ！」

避けるに徹しようと思った矢先、管理人さんのスピードが急に上がりました。

お陰で目測を誤り、軽く腕を掠ってしまいました。

掠っただけのはずなのに、服が破けて肉が少し持っていけるとかどうという力をしてるんでしょうね？

「ほらほら、抵抗しないとどんどん血に染まるわよ」

「いやぁ……っ！ これも一種の……っ！ 抵抗だと思っ……うんです

けどねっ!!」

何回か掠りつつも、繰り出される日傘の斬撃を避けきって見せました。

うん、これをずっとか正直遠慮したいです。

折角気に入っている着流しも、所々裂けてしまってますし、ボクの血で色がさらに深い黒になってしまってるじゃないですか。

っていうか、なんでボクって攻撃され続けてるんでしょうか？

特にこの管理人さんに失礼なことをした記憶も無いですし、そもそも初対面ですよ。

「てい!」

「……っ!」

流石に避けきるのが辛くなって来たので、一応目晦まし変わりに狐火の幻術を管理人さんの前に発生させました。

熱さや火傷するような物でなく、狐の得意な化かす物ですけどね。

突然目の前に火の玉が浮かんだおかげか、管理人さんは余分に後ろへ飛び退いて距離を取ってくれました。

「一先ず、自己紹介でもしておきましようか、最近幻想郷こくごに来た銀狐と申します、以後良しなに」

未だ戦闘の構えを解いてくれない管理人さんに向かって一礼をします。

ボクの方も警戒を解いた訳ではないので、もし飛び掛って来られても避ける位はできます。

飛び掛ってこないで頂いた方がいいのは間違いないんですけど。

「太陽の畑の主、四季のフラスターマスター 風見幽香よ」

太陽の畑……確かに、これだけ立派な向日葵群だとその名は相応しいかもしれませんね。

そんな事を考えつつ、ボクは次の言葉を紡ぐことにしました。

「それでは風見さん、なんで貴女はボクに襲い掛かってくるんです？」

「そうね……一つは太陽の畑に踏み込んできた侵入者を叩きのめすため」

ジリジリと間合いを詰めてくる風見さんに対して、ボクはジリジリと後ろへ距離を取る事で一定の距離感を保つ努力をします。取るに足らない距離かもしれませんが、逃げるための距離があるのとなしいのでは大違いですから。

しかし、周りから見るとかなりシュールな光景かもしれませんね。二人して一定の距離を保ちつつも身構えながら会話をしているんですから。

「もう一つは、私の直感が貴方は強いと囁いてるからかしら？」

「一つの理由はすみませんと言うしかないですけど、もう一つは完

全な言いがかりですよね？」

「そうでもないわよ、妖力を使っていないとは言え、私の攻撃をここまで避けてるんだから」

どうやら、避けるに徹したのは悪手だったようです。

風見さんの台詞から考えるに、大抵の相手は避けることも出来ずに最初の方で倒されてしまうんでしょうね。

見えない踏み込みと、あの威力から考えればそれも納得できてしまいます、とはいえ納得したくありませんが。

「ふふ、どうすれば貴方は本気で私と戦ってくれるのかしら」

——叩き潰す？——磨り潰す？——捻り潰す？

かなり物騒な台詞と共に、風見さんは嗜虐的な笑みを深くしました。うわあ、本気で冷や汗出てきたんですけど……ボクは虐められて喜ぶような趣味はないんですから。

「避けるだけじゃツマラナイわ。さあ、一緒にオドリましょう？」

笑みが、さらに深くなると同時に風見さんは右手をボクの方へと向けてきました。

そしてそれと同時に走る、動物としての本能が叫ぶ直接的な危機^{死の}予感^{気配}。

逃げないと確実に命が刈り取られるのが間違いないと、幻視するほどの脅威として。

———マスタースパーク

視界一杯に広がる端の見えない妖力の奔流が、ボクへと向かって無慈悲にもノータイムで放たれてきました。
流石にちよつと、これを直接喰らうのはマズい……ですねっ!!

———虚言『在って無き幻（現）実』

風見さんの妖力が当たる寸前に、ボクは能力を展開することにしました。

このまま喰らっては自分の身が危険ですし、避けるには距離が足りな過ぎます。

とはいえ、能力を使用してしまった以上風見さんが矛を収めてくれる可能性は零と言っていいくらいに下がってしまうでしょうね。

「あら、当たったと思ったんだけど？」

「ええ、しっかり確実にそれはもう直撃しましたよ？」

風見さんの手から放たれていた攻撃が止むと、その射線上は見るも無残な傷痕を残していました。

しかし……あの状況でも向日葵畑には一切影響が出てないって言うのもまたすごいですね。

避けていたつもりでしたが、さりげなく誘導でもされていたんですよか。

「能力によるものですので、お気になさらず」

虚言、つまり嘘のことであり、ボクという存在を一時的に『嘘』にすることで回避させていただきました。これも万能の回避能力と言うわけではなく、あくまで一時的にしか存在を『嘘』にする事はありません。

ですので効果時間は短く、もし風見さんの攻撃がもうちょっと長く続いていたら間違いなく実害が出ていたでしょうし。

「遠距離はあまり効果が無いのかしら……それなら、接近戦で試すだけよ」

「いやあ、もう試すのはお腹一杯なのでこの辺で打ち止めて頂きたいんですけどー」

「ふふ……だあめ！」

あの一撃は風見さんにとってある程度自信があるものだったのか、完全に妖力の放射ではなく、完全な肉弾戦のスタイルで三度ボクへと日傘を振り下ろして来ました。

先ほどと同じ軌道なので、ボクもまた同じように避けようと思いましたが……

ですが、先ほどと同じなはずが無かったんですね。

「……っ！ これは、蔦ですか!？」

「捕えた……わっ!!」

「ぐっ!!」

後ろに飛んで避けた瞬間、地面から生えて来た蔦にボクの両足は拘束されてしまいました。

そして、日傘はフェイントだったのか地面を挟ることなく、風見さんはさらに一歩踏み出してその右腕をボクへと向かって突き出して来ていました。

妖力で強化でもしているのか、ボクの腹へ突き刺さるかのように撃

ち込まれた拳が、ミシミシと嫌な音をたてながら振り抜かれました。

「……流石に、直撃だどうしようもないようね」

鳶のせいで後ろに衝撃を逃がすことも出来ず、地面へと叩きつけられました。

どれほどの力が込められていたのか、ボクと接した地面は小規模ながらも陥没を起こす程の衝撃があったようです。

「げほっ……ごほっ……」

「もう降参かしら？」

鳶がどこかへと姿を消し、ボクは蹴り転がされうつ伏せになりながらも腹の中に渦巻く異物感を吐き出しました。それと同時に吐き出され混ざる鉄のような味と独特の匂い。

……アバラが数本折られましたか、折れた骨が多少内臓を傷つけてしまったみたいですな。

血を吐くという事は、胃のあたりかもしくは肺あたりを傷めたのでしよう。

「……段々、腹がたって来ました」

ここまでやられて、温厚で居続けるほどボクは聖人君子でもありません。

何が悲しくてここまでボコボコにされなきゃいけないんでしょうね？
そもそもここに来たのはたまたまですし、ついでに言うところの向日
葵畑の侵入者と言われてもボクはここを害するような気もさらさら
ありません。

「……妖力循環」

普段は垂れ流し状態の妖力を、意識的に身体の中を循環させます。
妖力という糧を得た身体が休息に癒えていくのを実感します。
流石に骨折を瞬間的に行きませんが、応急処置程度にはなるで
しょう。

先ほどまで感じていた胸のもやつきも収まってきましたし……

「とりあえず、お話は聞いていただきますが……その前に物理的に
お話ししましょうか？」

着ていた着流しは所々裂けてボロボロですし、それと同時に血が付
いて赤黒くなってしまうています。さらに先ほど地面に叩きつけら
れたせいで、土汚れまでオマケでついてますし……

結構この着流し気に入ってたんですから、それ相応のお礼はさせて
もらわないといけませんよね。例えば他の誰かが否定しても、ボクが
否定させません。

「ふふ……さっきとは違って、良い眼だわ。肌を感じるくらいの純
度の高い殺気ね……」

瞳孔が狭くなったような感覚と共に、五感を研ぎ澄まさせていきます。これよりこの瞳に映る光景は全て、ボクの感覚の支配域となります。五体満足での話し合いはもういいです、何より先よりボクの話聞いていただける状況を作り出してしまいいましよう。

———模倣『我に模倣出来ぬモノは無し』

尻尾の先に数と同じだけの火の玉が浮かび、ボクの周りを取り巻きます。

妖術である狐火、それと妖狐としてのボク的能力を混ぜ合わせた複合業です。

ちようど良く、先ほど見せていただいたばかりですし意趣返しにはちようどいいでしょう。

ボクの『模倣^{化かし}』とくと味わって頂きましょう。

——幻焰『焼き尽くす狐の焰』

「なっ……これは私の!？」

「どうぞ、先ほどのお礼です。避けるなり受けるなりご自由にどうぞ」

狐火を纏わせた風見さんの妖力の奔流と同等の妖力砲。

それを目の前にして、風見さんは未だ嗜虐的な笑みを浮かべながらその手に持つ日傘を広げました。

どうやら、避けずに受けきるつもりなのでしょうね。

「面白いわ! 私と貴方の妖力、どちらが勝るかの勝負よ」

そう高らかに宣言するかのように叫ぶと、風見さんは真っ向からボクの攻撃を広げた日傘で受け止めました。

一時的な拮抗に見えますが、次第に押し込まれて行くようにずり下

がっついてます。

伊達に数千年生きて来た訳じゃありません、妖力だってそこいらの妖怪よりは多いんですよ、ボクはっ！

「これで、終わりです！」

「くっ……あああっ！！」

割と手加減無しに妖力を込めて、未だ受けきろうとする風見さんを周囲もろとも吹き飛ばしました。結局受け切る事はできず、風見さんはボクの妖力の奔流に飲み込まれました。

「……生きてます？」

「……なんとかね」

妖力が収まると、そこはもう局地的に焼け野原かと問いたくなるような光景になっていました。地面は抉れ、そこに生えていた植物などは一切その姿を消しています。

さすがに狐火が混ざっていたからか、焦げたような匂いもしています……

そして、地面にボクよりもボロボロになりながら局所的に破れて少し際どいところがみえるに服なり横たわっている風見さんと、盾にした影響からか、これまた破れている日傘がそばに落ちていました。

「これで、満足していただきましたか」

「ええ、これ以上は暫く激しく動けそうにもないし、貴方の馬鹿みたいな妖力の量に勝てる気もしないわね」

地面に倒れ伏したままの風見さんに問いかけると、半ば呆れたかのような声が返ってきました。予想以上に元気そうなのは、やせ我慢なのかよほどの頑丈さをお持ちなのか。

一先ず、命に別状はないようなので安心しました。ちよつと頭に来てしまっていたので、力加減なんてそこまでしていませんでしたからね。

「その程度で済んでる事が割りとびっくりなんですけど……っというかボクはそもそも戦いたく無かったんですよ？」

ここまでボロボロにしまして今更言えた義理じゃないですよね……でもまあ、ボクも結構ボコボコにされましたしお相手って事にしていただきますしう。

立てますか？と片手を差し出すと、風見さんは割りとしっかりした動きでボクの手を掴み立ち上がってくれました。

「あのスキマ妖怪とかよりよっぽど手ごわい癖によく言うわ」

「スキマ妖怪……ああ、紫さんの事ですか？」

「あら、あのスキマと知り合い？」

「知り合いといいますか、ボクが幻想郷（こくごう）に来て始めてあった方ですね」

藍さんっていうご同輩とも会えましたし。

そう伝えると、風見さんは少し考えるような動きをした後、何事もなかったかのようにボクに向き直りました。

その時に———あの九尾と同じ種族なのね———なんて言
ってたような気がするの、は気のせいとしておきましょう。

「所で風見さん、身体の調子とか大丈夫ですかね？」

「私の事は幽香でいいわ。負けてしまったけど久々に面白い闘いが出来たし、多少痛むけど心地いいくらいだわ」

多少痛むだけって……本当に頑丈ですね。言ったらなんか怒られるか笑顔で殴られそうなので言いませんけど。

それにしてもさっきの小競り合いで風見さん……改め幽香さんは満足していただけたようです。

「いやあ、その一部だけ聞くと強そうな相手にはとりあえず喧嘩を売ってるように聞こえますねえ……」

「幻想郷でなら、一通りの相手とは一度は戦ったことがあるんじゃないかしら？」

どうやら、そう聞こえるだけじゃなく実際に喧嘩を売っていたらしいです。

幽香さん曰く、あからさまに弱い相手には何もしないそうですが、強そうに見えたり強いと解る相手なら一度は戦って見てるそうです。嗜虐的な笑みが良く似合う通りの好戦的な方ですねえ……

「さてと、気も済んだし、とりあえず此処をどうにかしようかしら」
「ああ、結構ガタガタになっちゃいましたからねえ……」

ボクと幽香さんの妖力砲によって、向日葵畑は無事ですけど、その周りがちよつと残念な光景になってしまってます。ボクが放った方向に至っては所々焦げてますし……

どうしようかと、ボクが首を捻っているとボロボロになった日傘を片手に幽香さんは剥き出しになっている地面へと日傘の先端を向けました。

「自己紹介したと思うけど、私はフワーマスター。能力は『花を操る程度の能力』よ」

幽香さんから広がるように、剥き出しの地面から植物が生え、色とりどりの花を咲かせていきました。削れた部分はそのままですがあつという間に向日葵畑の周りが植物で埋まってしまいました。

数分もしない内に、ボク達が争っていた跡は辛うじて残る地形以外跡形も無くなっています。

「はー、凄いですね……これだけの範囲に一気に花を咲かせるなんて……」

向日葵畑には及ばずとも、見事な花畑についついたため息が漏れるのも仕方が無いでしょう。

それだけ、幽香さんが行った事は幻想的であり、現実味の薄い事だったんですから。

「誰かさんが日傘を壊してなきや、それこそ瞬きの間に咲かせられるんだけどね」

「いや、それって妖力の問題で日傘関係ないですよね？」

「ふふ……さあ、どうかしら？」

若干意味深な目を向けられましたが、そもそも能力って妖力とかがあつてこそですよね？

媒体としての日傘が壊れたからなら解りますけど、幽香さんはそもそも素手で妖力砲撃ってたから関係ないですよね？

だからそう妙な気分になるので流し目でボクを見るのは止めていただきたいんですけど。

「ふう……一先ず、この見事な向日葵畑と花畑を見ながら一杯いかがです？」

このままだと何をされるのかわからないような気がしたので、汚れるのも構わずボクは地面へと座り、紫さんの能力を模倣したスキマからお酒を取り出しました。

そのまま、近くで立ったままの幽香さんに向けて、同じく取り出した朱塗りの杯を差し出します。

「あら、いい香りね」

「ええまあ、一応年代物のお酒ですから」

何百年か前に手に入れた油揚げに合うお酒でもいいんですけど、折角の花見なんですからそれにあったお酒を今回は選んでみました。その芳香がお気に召したのか、幽香さんはボクの前に座ると、杯を受け取って迷わず一口で飲み干してしまいました。

「味もいいわね、もう一杯頂ける？」

「ええ、どうぞ」

いい飲みっぷりですねえ……ボクも頂きますか。

二杯目からは少しずつ、味わうように飲んでいる幽香さんに続いてボクも自分の分を注いで飲み出す。

こんなに見事な花を見ながらの花見酒というのも、中々良い物ですね。

「それで、結局貴方は……銀狐だったかしら？何をしに此処に来たのかしら？」

「それって、最初に聞くことであって戦った後に普通は聞くことじゃないですよー？」

まあ、険悪な雰囲気ではないのでいいんですけど。

どうやら幽香さんもボクがこの場所を害する為に来た訳じゃないと理解していただけてるようですし。

「理由としては本当にたまたまですよ、紫さんのスキマを使って出てきた場所がここだったというだけですから」

どこかに着けばいいだろうという認識で移動しましたから、行き先はたまたまです。

もう一度スキマで移動すればまた違う場所に出るでしょうし。

今は、一先ず先ほど消費した妖力の回復ついでに花見を楽しむのが目的ですね。

「まあ、多少ゴタゴタしましたがけど、結果的にこうして幽香さんのような綺麗な人とお酒を飲めてる訳ですから、悪いことばかりでもないですね」

「あら、それは口説いてるつもりかしら？」

「まさか、ボクにそこまで甲斐性はありませんよ」

先ほどの影響で服などがちょっとボロボロですけど、それを差し引いたとしても幽香さんは美人だと思いますよ？緑色のショートボブに真紅の瞳、白いカッターシャツにチェックのスカートと十二分に幽香さんの魅力を引き出してると思います。

そんな人と飲むお酒がまずい訳が無いですし、この景色がより一層美味しさを引き立たせてくれますから。

「ふうん……素で言ってるあたり天然なのかしら？」

「はい？何か言いましたか？」

若干真紅の瞳を細めて、呆れたように何かを呟いたように見えたんですが、聞き返しても肩を竦めるだけで教えていただけないようです。

はて、ボクは何か失礼なことを言ったのでしょうか？

「なんでもないわ、もう一杯くださいな、狐さん」

「ええ、喜んで」

聞いても教えていただけない以上、これ以上無理に聞くのは野暮というものでしょう。

まずは、この景色を楽しみながら、今この時を楽しむのを優先するのが一番です。

そう思い、ボクもまた幽香さんに注いでもらったお酒をその胃に収めることにしました。

さて、この景色と空間を楽しんだ後は、次はどこに行ってみましようか。

第三尾 どうやら、戦わなくちゃいけないようです（後書き）

と、言うわけで第三尾お送りいたしました。

バトルしてるようであんまりしてません、ていうか銀狐は大半逃げてます。

コメディーとかギャグである何か棒のような（刀だったり竹刀だったり）を振り回す幼馴染から逃げる主人公とかを想像していただければ大体間違っていないです。

あと、思いつきで決めた能力ですけど、案外卑怯ですね『模倣』って。

大体見てしまえば覚えてというか、使えるんですから。

唯一無二とか、サトリさんの能力とかを『模倣』できるかは考え中です。

話し次第では似たような事するかもしれませんが、まあどうなるかは未定です。

第四尾では、小さなカリスマ持ちの妹大好きさんの所にでも向かわせようかと思ってますが……と、なるとあの狂気持ちにされてるお嬢さんを書かないといけませんね。

うーん、結構ムズかしい気がしますけど、なんとかするでしょうか。

さて、あとがきを長々書いても仕方ありませんしこの辺で。

お気に入り登録してくださった方、この場を借りてお礼を申し上げます。

また、誤字脱字、感想意見等ありましたら是非頂けると作品を作る上での励みになりますので、宜しければお願いいたします。

それでわ、次回またお会いしましょう。

第四尾 どうやら、失礼な事を言ったようです。(前書き)

誤字脱字、感想などいただければ幸いです。

第四尾 どうやら、失礼な事を言ったようです。

またしても、ペツと吐き出されるようにスキマから追い出されました。

どうも、代わり映えのない挨拶で申し訳ありませんが、ボクです。

「おー、モノの見事に紅いですねー。」

太陽の畑で幽香さんとお酒を飲んだ後、まだいろいろ見て廻りたいからとその場を失礼したボクですが、移動に歩きではなく再びスキマを使いました。

見て廻るのは、もう数回スキマに吐き出されてからでもいいかなって思っんですよ。

「黄色の向日葵畑の次は、紅い洋館……なかなか色鮮やかになったもんですねえ、幻想郷」

あ、ちなみに飲んでいたお酒の残りはそのまま幽香さんにあげました。

どうやらお気に召したようで、今度太陽の畑に行った時は侵入者ではなく一応お客として扱ってくれるらしいですよ？

「で、ここはどこなんですかね？」

「はあ……解っててここに来たんじゃないんですか？」

紅い洋館の入り口で寝ていた、緑色の中国服に似た服を着た女性に回答を期待せず尋ねるだけ尋ねて見ます。

唐突に現れたボクに警戒してか、女性は目を覚ましある程度距離を取りながら、拳法家のような姿勢を取っています。

うーん……このまま近づくとなにやら攻撃されそうな気配がヒシヒシと伝わってくるんですが。

「いえ、まったく。特にこれといった目的もなく移動してる途中でしたので」

幽香さんといい、目の前の女性といい。随分と好戦的な人が多いような気がしますね。

とはいえ、昔はそこまで他の妖怪と遭遇するような事も無かったからかもしれません。

縄張り意識が強かったですからね、侵入しなければ会う事もまずありませんでしたし。

「紅魔館という言葉も知りませんか？」

「へえ、コウマカンって言うんですかー。ちなみに漢字はどのような？」

「紅に妖怪などを表す妖魔の魔に館で、紅魔館です」

教えていただいた漢字を連想しながら、改めて目の前の屋敷を見て

みると納得できる名前だと思いました。なんというか、ここまでこ
だわって紅色にするとは、よっぽどこの色が好きなんでしょうねえ
……

「ああ、そういえば自己紹介がまだでしたか……最近ここに来た銀
狐と申します」

「あ、どうもこれはご丁寧に……私は紅美鈴ほんめいりんです、メイリンと呼ん
でください」

ペコリと頭を下げると、丁寧にも同じように挨拶を返してくれまし
た。

ああ、そういえばここに来て初めて平和的な挨拶をした気がします。
紫さんは拉致も同然ですし、幽香さんに至っては攻撃してきました
からねえ……

「まあ、そんな訳で幻想郷を見て廻っている途中なのですが、屋敷
の中は見れますか？」

「えーっと……それは、どうでしょう……？」

困ったように頬をかきながら、美鈴さんは苦笑を浮かべるだけでし
た。

ふむ、美鈴さんがこう答えると言う事は、ここは誰か別の人のお屋
敷という事なんでしょうか。入り口に立っていたっていうのもアレ
ですし、恐らく美鈴さんは門番かソレに類する仕事に従事してる方
ということでしょう。

「来客かどうかの判断はレミリアお嬢様か咲夜さんがするので……私からはなんとも」

「と、なるとそのお二方に会えないと屋敷の中は見られないということですかー……」

見た目がこれだけ立派なお屋敷ですから、中もちょっと興味があったんですが……

さすがに無理に押し通る気ありませんし、そんな事をしてしまえば美鈴さんにご迷惑をかけてしまいますよねー……

うーん、残念ですがまた日を改めて訪ねるべきでしょうか。

「まあ約束をしてた訳でもありませんし、そもそもここに来た初めてモノが入れてくれというのも厚かましいでしょう。また機会があればって所ですかね」

「……………うう」

……………それじゃあお暇します。

そう言おうと思った矢先、何故か美鈴さんは感極まったと言わんばかりに涙を流してボクの両手をガシッと掴みました。

はて……何故にこのような対応になってるんでしょう？

「門番をやってて、初めてまともな対応をした気がしますっ！白黒は強引に通っていくし、妖精は悪戯しようとしてくるので撃退しか出来ませんしっ！！」

「はあ……それは大変ですねえ……っていうかそれだけ聞くとマト

モな対応がない気がします」

白黒というのが何の事かわかりませんし、妖精を撃退っていうのもいまいち理解できませんでしたが、どうやらここに訪れる方はマトモに来る事が無いらしいです。

他人事で申し訳ない気もしますが大変ですねえ……

「どうにか白黒にも貴方のような対応を見習って欲しいです……」

「その白黒さんが何方かわかりませんががんばってくださいね」

嬉しいんだか、悲しいんだか判らない表情をされるとこちらとしてもどう声をかけていいか判りかねるので困るのですが……

立ち去るタイミングを微妙に失ったボクがこの状況をどうしようかと考え、空を仰ぎ見て美鈴さんへと視線を戻すと、いつの間にか人が増えていました。

「はて……先ほどまではいらっしやらなかったかと思いますが……
貴女は？」

生き物が持つ気配と言いますか、必ずしもあるハズの『存在感』が唐突に現れた感じがします。

まるで一瞬でその場に現れたかのような……瞬間移動ですか？

「……あ、咲夜さん」

「美鈴が珍しく起きてると妖精メイドが騒いでいるから見に来て見れば、何をやってるの」

「どうやら、先ほど名前が挙がった方のお1人のようです。」

「コチラを一瞬だけ値踏みするような視線がありました。が、それもすぐに影を潜め美鈴さんとお話を続けられています。」

「っていうか、ボクの質問は放置ですか。」

「えーっと、美鈴さん。こちらは？」

「あ、私と同じこの館で働いている咲夜さんです」

「いやまあ、ソレはなんとなくわかるんですけどね。」

「ボクが聞きたいのとは合ってるようであってないんですがー。」

「そんな心の声が届いたのか、話を切り上げた咲夜さん？がこちらを向いてくれました。」

「失礼致しました。私はこの紅魔館のメイド長を勤めている十六夜咲夜と申します」

「あまり長くないメイド服の裾を摘まんで優雅な言える仕草で一礼と自己紹介をして頂きました。余りにも自然な挨拶だったのでボクも一瞬遅れてですが、挨拶をしなくてははいけませんね。」

「これはご丁寧。ボクは銀狐、特別な名などない齡を重ねた単な

る狐の妖怪です」

着流しなのであまり格好がつかないかもしれませんが、片手を胸の前に水平に置き、お辞儀を行う。確か西洋風の礼でしたか？あまり詳しく覚えていないので多少不恰好となるのは許していただきましょう。

「ご謙遜を、その妖気はただ齢を重ねただけでは身につきませんわ」
「そうですね、幻想郷の中でもそこまでの妖力を持ってる妖怪は少ないですよ」

表情こそ笑顔を保っていますが、一瞬だけ見せた目が値踏みの色……いえ、この場合は警戒と言い換えた方がいいかもしれません。

気付かない者は気付けないくらいの小さな変化でしたが、元よりコチラは変化や化かしを得意とする化生の類です。小さな変化でも早々に見落したりはしません。

まあ、十六夜さんの隣にいる美鈴さんは気づいていなさそうですけどね。

「お嬢様より、貴方様をご案内するように承っておりますので、ご案内致しますわ」

ボクが警戒の色に気付いた事を感じ取ったのか、十六夜さんは表情を改めると従者と言う言葉がふさわしい動作で、屋敷に続く道を開け着いてくるように促して歩き始めました。

美鈴さんの方を見れば、行っているらしくニコリと笑顔でどうぞと道を譲ってくれます。

……ふむ、どうやら十六夜さんや美鈴さんの主からご招待を予想外に頂いたということですか。

「さて……これが吉とでるか凶とでるか。まあどちらに転んでも些細な事ですか」

どっちかと言ってしまえば嫌な予感とも取れるモノがボクの足を引きとめようとしている気がしますが、所詮は止めようとしている程度ですから、なんとでもなるでしょう。本当に危険な領域だったとするのなら、ボクがこうして着いていこうとすらしないますから。

「それでは、お邪魔します」

さてさて、この紅いお屋敷の主とはどんな人なんでしょうかねえ？
っていうか、こんな色した屋敷に住む存在を、どこかで見聞きしたような気がするんですが、気のせいでしょうか。

――
なにわともあれ
――

モノの見事に、室内まで紅で統一されたお屋敷の中は時折出会う妖精メイドという方以外はほぼ一色でした。微妙に目に来ますね、この色合い。

そして改めて招き入れられて気付いたのですが、外観と中身が合っ

ていないような気がします。外から見てもそれなりの大きさのお屋敷でしたが、内部はそれ以上に広く感じられるんですね。

ソレがどうも先ほどの近視感に加えて違和感というか……なにか特殊なモノを用いているかのような感覚を受けます。

「随分と、広いお屋敷ですね。それにしても窓が少ないように感じますが」

「お嬢様は日の光がそこまで得意じゃありませんので、こういった様式にさせて頂いています」

これだけ広いのならば、普通なら日の光を多く取り入れる為に窓がそれ相応にあるはずですが、何故かこの屋敷は逆に窓が少ないのです。

日の光が得意じゃないという問題を通り越した少なさですよ。それにしても日の光が苦手とは、やっぱりどこかで聞いた記憶があるようなないような？

「へえ……それじゃあこの屋敷の色合いも？」

「はい、お嬢様の指示です」

前を向いたまま、若干事務的とも思えるようにボクの質問に答えてくれる十六夜さん。

嫌われているというよりは、やはり警戒されているように感じられます。

でも、さっきから話している様子からすると警戒っていうのも何か違うような気がするんですね……？

それが判らないからこそ、普段ならそんなに気にしない事を聞いてみるんですが。

「そういえば、お屋敷の主のお名前を先にお伺いしておいても大丈夫ですか？」

折角ご招待いただいたのですし直接面会もする訳ですから、相手の名前くらい聞いておかないと逆に失礼になったら困りますからね。それと一つ、先ほどの違和感の正体らしきものが『銀狐』の記憶の方から浮かんできてますし……深紅の屋敷と、そこに居を構える西洋妖怪の名前なんですが。

「お嬢様の名はレミリア、レミリア・スカーレットと言います」

うわあい……ビンゴですねー、一応その名前は聞いたことがありますよー。

向こうじゃ何百年か前に聞かなくなりましたが、こっちに来てたらそりゃ当然聞かなくなりますよねえ。

それにしても、濃霧の吸血鬼まで幻想郷（こくじょう）に来ているとは……侮れませんね、幻想郷。

「レミリアさん……ですね、十六夜さんありがとうございます」

まあ、知らない相手と言うわけでもないですし、通りでボクが来る

のを止めようとしなかった訳ですか。

確かに吸血鬼は驚異的な能力を持っていたりもしますが、相手が出来ない訳じゃないですし、何より噂で聞く濃霧の吸血鬼があの捏造された方でなければなんとでもなりそうです。

「もう間もなく、お嬢様がお待ちになっている部屋へ着きます」

「ああ、意外に近かったですね」

「度々失礼を致しますが、銀狐様。一つ宜しいでしょうか？」

途中で歩みを止めた十六夜さんに疑問符を浮かべつつも続きを促します。

すると、一瞬で間合いを詰めた十六夜さんが、ボクの首筋にいつの間にか取り出していたナイフを突きつけていました。
うーん、やっぱり移動が見えませんでしたね。目を離れたつもりもなければ、今度は意識的に見るようにしていたんですけど。

「お嬢様に何か狼藉を働く事があれば、すぐさまその首と胴が別れるモノとと思ってください」

何時でも私はボクを殺せる。そんな意思が十二分に込められたナイフが、首の薄皮一枚で止まっています。
ですが、ボクとしては殺気も特に込められていない形だけの警告なんてものは怖くもなんともありません。
ただでさえつい最近濃密過ぎる程の殺気を受けたばかりですからね……言ってて若干悲しくなりますが。

「それはどうも、ご忠告感謝します。ボクも唐突に攻撃を受けるのは嫌ですから」

「……この状況を作り出されても、『殺される』ではなく『攻撃を受ける』なんですネ」

ええまあ、確かに十六夜さんの動きはさっぱり見えませんでしたけどね。

見えないのと避けるのはボクにとっては別物ですから、それに見えるモノが真実という訳でもないんですよ？

「まあ、そのまま斬られたとしても別に影響はありませんから」

「なら、一度試してみましようか？」

「何か思うところがあるのでしたらどうぞ。ボクはこのまま動きもしませんから」

———ただし、攻撃された分は化けてでも仕返ししますよ？
そう言って笑いかけると、十六夜さんは迷う素振りを一切見せず、ボクの首を斬りつけました。

よほど切れ味の鋭いナイフなのか、一瞬遅れ、思い出したかのように噴出すボクの命の水^{血液}。倒れる身体と、そこから歪な円状に広がるアカイ血溜り。

それを特に感情の籠っていない目で見つめながら、十六夜さんはナイフをどこかへ片付けました。

「お嬢様には、お客様は帰られたと伝えなくてはいけませんね……」

小さく息を吐いた後に呟く十六夜さんを、ボクは後ろから眺めていました。いやあ、ここまで迷いなく自分が殺されるっていうのも斬新ですねえ。

と、言いますか、ここで十六夜さんにいなくなれると、この広いお屋敷の中で迷子になっちゃいそうですし、そろそろ化かし合いも終わりにしましょうか。

「いやあ、別に帰ってはいませんよー？」

「っ!？」

驚いたように振り返ってボクを改めて見る十六夜さん。

そして今までボクの身体が転がっていた方を見直せば、まるで幻だったかのように血溜りもその中で横たわっていたモノもいなくなっています。

ええ、なんとなく予感がしていた時からすでに妖力で創った分身を十六夜さんの後ろに付かせていただけなんですよね。

「うりゃ」

十六夜さんが次に何かの行動に移る前に、ボクは先ほどの仕返しの意味を込めてモフモフなボクの尻尾の一本を使って十六夜さんの首に巻きつけます。

この尻尾、長さは妖力次第で多少であれば伸縮自在なんですよね。近距離であれば、尻尾で相手に触れる事だってできますし、もちろ

ん意思どおりに動きます。

「え、ちょっと、なにを？」

「ボクの分身を殺された仕返しです。思う存分モフモフに溺れてください」

こう言うのもなんですが、ボクの尻尾のモフモフ感は相当なものですよ？

見て判る毛並みの良さに、適度の太さ、ソレに包まれる感覚と言えば中々の魅力を持てますからね。

「いつの間に私の背後に……ああ……気配なんて無かったのに……このモフモフが堪らない……」

なんとかいうか、必死に真面目な状態を続けようとしてますが、言葉の所々に尻尾の魅力に負けたようなモノが混ざっていますよ？
そうなって貰えるくらいの自負はありましたけどね。

「ボクとしては、別にレミリアさんをどうこうしようと言う気もありませんよ」

「……………」

「それに招待して頂いた方に失礼を働くほど礼儀知らずでもないつもりですから……って、聞いてます？」

どうにも反応が薄いようなと思えば、十六夜さんはすっかり首に巻かれたボクの尻尾に癒されてました。

巻かれた尻尾を嫌がらないばかりか手で優しく撫でられている様子を見ると、癒されているという言葉に納得していただけるかと思えます。

ただ、撫でられてる方は若干くすぐったいんですけど。

「と、言うわけでお待たせするのも悪いのでそろそろご案内お願いできますか？」

「あ……失礼しました。敵対なさる訳でもなさそうですし、改めてご案内します」

尻尾を元に戻すと、若干寂しそうな声を出されてしまいました。と、いかか会話だけ聞くとなんかボクと十六夜さんが男女のアレコレみたいです。

尻尾のモフモフ、会話を聞いていただくには有力なように使いどころが難しいようです。

これからはもう少し考えて使わないといけませんねー。

でも、ボク自身はモフモフを止めません。だってこの尻尾はボクの一部ですから、いわば特権ですよ。

「コチラで、お嬢様がお待ちです。 お嬢様、お待たせしました。 お客様を連れて参りました」

—————入りなさい。

ノックをした後、十六夜さんが部屋の中へと声をかけました。

少しだけ間を置いて、中からは威厳溢れる声とそれに合わせて僅かに妖気が部屋から零れてきました。
流石は濃霧の吸血鬼ですね、今まで会った人たちに負けずとも劣らない量と質の妖気です。

「失礼します。銀狐様、此方が我が主、レミリア・スカーレットお嬢様です」

「ようこそ客人、歓迎するわ」

高価そうな椅子に座り、目の前の机には用意されたばかりに見える紅茶らしき物を置きながら、悠然とした態度でボクへと話しかけて来ている方。

なるほど……この人が濃霧の吸血鬼ですか。

やはり噂は噂通りとも言えます……が、なんといいますか。

「その椅子、ちょっと大きく高すぎて座りにくくないですか？」

肘置きに肘を置いて、手を前で組みたいのでしょうがいかんせん椅子の方が大きすぎて浮いてしまっています。さらに言ってしまうと組まれた足の下は結構な空間があり、失礼な物言いをするならば親の椅子に座ってみた子供みたいです。

「……………」

「……………」

「……………」

ああ、しまった。始めはきちんとした挨拶をするつもりだったんですが、あまりにも目の前の光景に違和感がありすぎてつい先にソレを言ってしまった。

先ほども十六夜さんに注意を受けたばかりだというのに。

「っ……」

「あははは……」

目を閉じて静かに主であるレミリアさんの横に立っている十六夜さん。

不遜な笑みを維持していますが、若干口元が引きつっているレミリアさん。

そして、やってしまったなーと軽い後悔をしつつも、あまり反省していないボク。

そんな三人の妙な空気が、招き入れられた客室を包み込んでしまいました。

さて、どうしたものでしょうか？

第四尾 どうやら、失礼な事を言ったようです。（後書き）

第四尾、お贈りしました。

姉妹が出るといいつつ、片方しか出てませんね。

進行の遅さが浮き彫りですよー、春じゃなくて夏ですよー。

そんなリリーの真似で許してください。

え、やっぱダメですか？ すいませんでしたー。

最近仕事が忙しくて書く暇がありませんでした。

また数日飛び飛びになるかもしれませんが更新が多少遅れる可能性が御座いますのでご容赦くださいませ。

それでは、また第五尾でお会いしましょう。緋月でした。

第五尾 どうやら、遊び相手をするようです。

———プチッ

そんな音が、目の前に座っているレミリアさんから聞こえたような気がします。

まあ、気じゃなくて間違いないとも思うんですけどね。

何故かというところ若干口元が引きつってますから、レミリアさん。

「なにやら失礼な事を言った様な気がするけど、気のせいかしら？」

「はて、威厳溢れる姿ですねとは言った覚えはあれど、ボクの記憶にはありませんが」

どうやら、聞かなかった事にしてくれるようなのでこっちもソレに乗っかることにしました。わざわざ不評を改めて買う必要はありません、これは人間？関係における重要な事ですから。

ボクが惚けたのを見て、十六夜さんから一瞬だけ漏れた危険な気配も一時的に治まりました。惚けてなかったら、またナイフがボクの首元にあったかもしれないねー。

「それで客人、貴方は何が目的で此処に来たのかしら？」

「ああ、これは失礼を。ボクの名は銀狐、見ての通りしがたい狐の人妖です。此処へは幻想郷漫遊の一旦で観光に来たと思って頂ければ」

紹介はされたけど紹介した覚えがなかったので、自分から頭を下げ

て自分と目的を告げます。言っている事に嘘はなく、事実今のボクは観光で幻想郷を廻っている状態ですからね。

なにやら拉致られたり、攻撃されたりとあまり平和な観光とは言いがたい気もしますが。

別段命に支障が発生しているわけでもないので別に構いませんけどね。

それはそれ、これはこれって言いますし。

「ふん、その程度の理由で我が根城へ態々来るとは、物好きな奴ね」
「お褒めに預かり光栄です」

褒められたような気もしませんが、相手を立てておく間にこの館を探らせて頂きましょう。主であるレミリアさんがいるという事は、ここは建物のほぼ中枢であると判断して、一先ず感知されない程度まで薄めた妖気を周囲へと徐々に広げていきます。

一応無駄に妖力量とかが多いので、こういった事に使用したとしてもボク自体の妖気が減ったり、密が疎かになったなんて事はありません。

「此方としても、濃霧の吸血鬼に会えるとは予想外でしたよ」

「へえ……その名を知っていると言う事は『外』にも居たことがあるのかしら」

「ええまあ、彼此数千年生きてるので、この世で行っていない場所っていう方が稀な気もします」

物見遊山は長く生きるものの娯楽ですよーと笑いつつも、大体館

を表面上は全てを包むくらいに広く薄く、ボクの妖氣を行き渡らせました。多少手間取ったのは、やはり外側から見えるこの館と、内部構造が噛みあわなかったせいです。

見た目より広いと称しましたが、事実見た目より広がったです。どうということなんでしょね？

「す、数千年？　その妖力を見て思ったけど、貴方もしかして天狐なのかしら？」

「生きてる年数なんて途中から数えるのを止めましたけど、天狐と呼ばれた事もあれば、空狐と呼ばれた事もありますね」

結論としてボクは銀狐であり銀狐でしかないので、廻りからどう呼ばれようと気にしてません。記憶にある中に同じ天狐や空狐から様付けされたがあるので、間違いなくその狐仲間よりは長生きなんでしょうけど。

「咲夜……狐が空狐と呼ばれるには何年だったかしら？」

「……『外』で言われていたのは最低三千年です」

「それ以上に生きてるって事ね……」

さて、なんだかんだで目の前の主従コンビがお話をしている間に屋敷内部は大体把握出来ました。何箇所かになかなか強い力を持ったお持ちの方がいるようですが、此処にいないので特に気にする必要はありませんかね。

物見遊山の狐程度に紹介する必要もないでしょうし。

「面白いわね、貴方。私が見ても見切れない運命^{モノ}を持って平然としてるなんて」

「はて、見るも何もボクは見ての通りの人妖ですから、面白いモノなんてないかと？」

唐突に零すようにレミリアさんがちょっと嫌な予感を感じさせる笑みを浮かべて、ボクへ話しかけてきました。先ほどまで話していたはずの十六夜さんは、再び主の後ろへと静かに待機しています。そういえば、先ほど十六夜さんに会った時と、今の一瞬で何かを『模倣』したような気がするんですが、まさかレミリアさん達は能力持ちですか？

「何やら気付いたようだから教えてあげるけど、私の能力は『運命を操る程度の能力』、応用次第で対象の文字通り運命を見る事すら出来るわ」

「はー……なんでバレたんですかね。顔には出してないつもりでしたが」

最初の意趣返しなのか、ボクの考えを読んだかのようにレミリアさんはわざわざ能力を教えてくださいました。自分の能力に対する絶対的自信の表れか、もしくはボクが歯牙にかける必要もない存在だと判断されたか、悩みどころですね。

しかしまあ、ボクの考えが間違っただけで無かった事も判明しましたし、細かい事は気にしない方向で行きましょう。

「言ったでしょう、運命を見ると。貴方の思考自体は解らなくても最終的に『結論』に達するのが早いか遅いかの違いよ」

「なるほど、そういう考え方も出来ますか。中々面白い能力ですね」

結果的に、ボクがレミリアさんの能力を知るという運命があり、それを見たレミリアさんが先に結果として能力を教えてくれる。辻褄合わせと言ってしまうと些か乱暴な気もしますが、そこまで大きく逸脱している訳でもないですね。

「と、言いますか。随分とボクへと情報を与えてくれますね？」

そこで疑問になるのが、何故ボクがレミリアさんの能力を知る事になるのかという事と、濃霧の吸血鬼とまで『外』で恐れられた彼女が、ボクに自分の情報を簡単に明かすのかと言うことです。

正直、ボクとしては能力のレパトリーが広がった程度ですが、正体や能力を知られると言う事は妖怪や悪魔からしてしまえば対処法を知られてしまうというリスクも発生します。

「ふふふ、それはすぐに解るわ。咲夜、彼をあそこへ案内しなさい……フランに会わせるわ」

「……かしこまりました」

ボクのような特殊な人妖を除いて仮定しますが、吸血鬼と言えば弱点を多く知られる種族でもあります。流水を渡れない、日光が苦手、

銀の杭で心の臓を穿たれるなどなど、致命的とも取れる弱点が多いのです。

それを知られると言うことは、ボクが敵対者であった場合には存在そのものの危機に直結する事になる……ハズなんですけど、敵対する気がないのですぐに崩れる前提条件ですが。

「おや、気付けば此処はどこでしょう？」

結局、レミリアさんとは顔合わせだけで彼女の本来の目的は別にあったようです。

何かを命じられた十六夜さんが傳いたと同時に、ボクの視界は一瞬で切り替わるように薄暗く重厚な門を映し出していました。

ボクが先ほどもでいた位置からするとかなりの距離がありますが……ソレも特に疑問に思う必要も無くなりました。

何故なら、ボクの方が改めて新しくひとつの『模倣』を認識したからです。

———時間を操る程度の能力

恐らく、この移動も十六夜さんの能力のお陰なのでしょう。

時間と言う概念を操り、移動時間というモノを零にしてしまう。

そうすることで、一瞬で現れたりまた同じく移動する事ができるよ

うです。さらに言ってしまうば、この館の内部が外観と比べて合わないのも、どうやらこの能力に起因しているようです。

「で、連れてこられた僕はここからどうすればいいんですかね？」

「……お連れしておいて失礼ですが、あまり動じませんね」

「まあ、長い人生拉致られる事もあれば殺し合いなんて事もありましたから」

殺し、殺され、追い、追われ。

まだ若かった時には本当に死に瀕した事もあれば、生きる為に已む無く相手を殺すことだってしました。そう言ったものの全てが今のボクを形成する土台であり、一部『オレ』としての記憶が嫌悪感を催す部分もありますが、存外『オレ』も破綻した性格だったようで、受け入れている面もありますからね。

「折角生きて、狐生を謳歌しているんですから、驚きや感心こそすれ動じるなんて勿体ないでしょう？」

「中々、自由な人生を過ごしていらっしゃるんですね……」

人生ではなく狐生ですけどねーとそんな無駄な事を考えつつ、思考を若干切り替えて目の前の門へと向けます。先ほど感じた大きな力の気配が、この扉の奥から発されているのを感じます。それと同時に感じる、一種の狂気。

狂った者の持つソレとは違い、狂いたくても狂えない歪んだ狂人が持つような殺意とも愛情とも取れない微妙な感覚ですね。

「先ほどレミリアさんが言ったフランさんが、この奥の方ですか？」

「妹様の気配が解るのですか？」

狂気

「そりゃまあ、ここまで濃密な気配を感じればよほど鈍くない限りは解るでしょうね」

余談ですが、愛憎は表裏一体がボクの持論です。

愛しすぎて相手が憎い、憎かった相手が愛しくなる。長い生の中でそんなのをザラに見てきましたから。事実殺し愛なんて言いませんけど、ボクも憎からく想う相手を殺したいとしたことだってありますし。

「……銀狐様には申し訳ありませんが、妹様の遊び相手をしていただきたく思います」

「遊び相手……ですか」

レミリアさんの考えはいまいち読む気がしませんでした。目の前の十六夜さんから感じるのは憐憫と少量の後悔、あとは小さな小さな希望……って所ですかね。

しがない狐のボクに何を求めているのかはわかりませんが、遊び相手をして欲しいと言われて断る理由も特にありませんし。

鬼が出ようが吸血鬼が出ようが、まあなんとでもなりますか。

「この奥にいますよね？　じゃあ行って見ます」

「……どうか、妹様をお願いします」

優雅な一礼と共に、十六夜さんはその姿を消しました。
また能力で移動して、レミリアさんの所へ戻ったようです。
未だ展開している薄い妖力に十六夜さんらしきモノがレミリアさんと認識している妖力のすぐ傍に現れましたから。

「さてさて、それではフランさんにお目通り致すとしましょうか」

そして、目の前の扉へと手を伸ばし、見た目どおりの重量のある扉を押し開きました。

視界は暗く、どこまで続いているのか解らない深い闇、深淵とも錯覚しそうな空間へと、狐火を生み出して揺らぐ事のない足取りで進み出すことにしました。

「なかなか殺風景ですねえ」

妖力を再び薄く広く伸ばし、周囲を把握してみると、そこはただただ広い空間と言える所でした。

どこまでも続くかのような広い空間、その奥の方に小さな人型を感じ取りました。

此処に他の誰かがいるような話も聞いていませんし、恐らくソレがフランさんなのでしょう、何やら蹲っているようにも感じますがそこら辺は出会ってから判断しても問題ないです。

「……おじさん、だあれ？」

「年は取ってますけど、そう言われるのはある意味初めてかもしれません……」

小さな体躯、吸血鬼らしくない綺麗な宝石のついたような羽、しかし何よりもアカク禍々しく光るアカイ瞳の少女。そんなフランさんから放たれた言葉に、ボクは予想外と言いますか想定外過ぎてショックを受けてしまいました。

確かに、ボクは齢数千年の古妖怪ですけど……見た目でいうならお兄さんでも良いと思うんですよね……

「あ、ごめんなさい」

「いえいえ、謝られる必要はありません。ですけど、出来れば銀狐かお兄さんと呼んでいただけると此方としては嬉しいですよ」

さすがにお爺さんとまでは言われなかっただけマシですけどねー。でもやっぱりおじさんと言われるのは悲しい気になりますので、自己紹介ついでに名前を教えました。

「うん、わかった、銀狐だね」

「ええ、始めまして、小さなお嬢さん」

「私はフランドール・スカーレット。フランでいいよ」

ニコリとまるで初めて気安い呼び方が出来る相手が出来たかのように、嬉しそうな笑顔を見せるフランさん。

扉の外で感じた狂気を欠片も見せないその笑顔なのですが、何やら

空虚なモノを感じざるをえませんでした。

「で、銀狐は何しに此処に来たの？」

「レミリアさんと十六夜さんのお願いで、フランさんの遊び相手になったらしいですよ？」

蹲っていた身体を起こし、喜びを表現するフランさんを微笑ましく見ながらも、此処に訪れた用件を話しました。すると喜色を一層深くして、フランさんは飛び跳ねるようにボクへと近づいてきます。どうやら見た目通りの幼い子のように、一層微笑ましさを感じながら近づいてくるフランさんを見守る無防備に出迎えました。

「本当！？ フランと遊んでくれるの！？」

「ええ、何して遊びましょうか？」

「えっとね、えっとね……」

———
ゾクッ

悩むフランさんが、何かを思いついたような顔をした直後、ボクの背筋を悪寒が駆け抜けました。これは前にも、幽香さんと戦わないといけなくなった時に感じた事のある絶対的な死の気配。

私と銀狐の殺し合い
「お人形さんごっこ!!」

———ザクッ

「……っ！ 中々、猟奇的なお人形さん遊びもあったもんですね」

瞬時にフランさんから距離を取りましたが、どうやら一瞬遅かったようです。

腹部に感じる熱い痛み。そして目の前で手刀を血で染めながら、避けられた事を驚くような表情を見せるフランさん。

なるほど、門の外から感じた狂気はコレですか……

狂気を内包しつつ、狂気を狂気として本人が理解していない。

「あれ、避けられちゃった」

「人形はボクで、壊れ遊ばれるされるのがお役目って言うことですか」

こうなる事を知っていて、レミリアさんも十六夜さんもボクをあえてフランさんの遊び相手として送り込んだと。道理で、十六夜さんから憐憫を強く感じ取れる訳です。

そしてフランさんもフランさんで、人形遊びはこういう物だと歪んだ解釈をしていると判断しましょう。

そして、ボクが押し付けられた役目は、フランさんが満足するまでの遊び相手^{壊し合い}を務める事ですか。

「あはっ、じゃあ銀狐。次はもっと早くいくよ？」

「是非とも、遠慮させていただきたいですし、もっと穏便なのがいんですけどー？」

「じゃあ、これならどうかな？……そおれっ！！」

可愛らしい声とは裏腹に、夥しい量の妖力弾がボクの周囲に出現しました。

うわー、色鮮やか過ぎて目に毒ですね、これ。

しかも避けるスキマがあるのかって言うくらいの密度で展開されますし……

「お人形さん遊びがダメなら、弾幕ごっこ！！」

「弾幕……言い得て妙ですねえ……」

弾幕ごっこなるモノが何かは解りませんが、フランさんから放たれた妖力弾は確かに弾幕と言えるでしょうね。

密度は高く見えますが、よくよく見ると避けれる範囲の逃げ場は存在するようですし、理解するまでは相手に合わせて見るのも手でしょう。

幽香さんの時程、濃密な殺意も感じませんし……狂気は相変わらずな感じですが。

「よ、ほっ、は、とと、あぶないですねえ」

「あはっ、すごいすごい！初めて見たのに全部避けれるんだ！！」

多少掠りながらも、この程度の速度なら特に問題なく避けられます。
というか掠らせてるのも身体に影響が出ない程度にしていますし、
うしないと無駄に体力やら逃げ場やらを失うからなんですけどね。

「じゃあ次はコレ！」

—————禁忌「レーヴァテイン」

放たれていた全ての弾幕を避けきると、本当に嬉しそうな笑顔を見
せながら、フランさんは持っていた杖のような物を炎の剣に変えて
凄まじい勢いで突っ込んできました。

顔が笑って持っている物が炎の剣って、随分とまあ恐ろしい組み合
わせもあったもんですね。

「ソレに当たると熱そうなので、一切合財避けさせて貰いますよ？」
「あはっ、避けれるの？」

「避けれるか避けれないかではなく、避けます」

普通の妖怪では、あっさり切り裂かれて焼滅するであろう速度で放たれる斬撃を、紙一重と言わず触れることすら許さず回避します。そして大振りから放たれた一撃を避けると、大きく後ろへと距離を取って間合いを遠ざけました。

近くで感じた熱量から察するに数千度とか言えそうだったんですけどー。

それを振り回す本人にはなんの影響も無いとかどういう仕様してるんですか。

「ねえ、避けてばかりだね？」

「ボクとしては、特に理由も無く相手を傷つけるのはあんまり好きじゃないんですよねえ……」

そもそも、ボクがフランさんに会った理由は遊び相手としてです。その内容が例え殺し合いになったとしても、ボクとしては『遊んでいる』感覚を抜いた記憶はありませんし、そもそもフランさんもこれを殺し合いではなく遊びと認識しています。

ですから、ボクが直接的に攻撃を加える必要もないんですよね。

「でも、そればかりじゃツマラナイから避けなくしてあげるね！」

———禁忌『フォーオブアカインド』

「わお……」

先ほどと違い、何か札のような物を取り出したフランさんが、目の前で四人に増えました。感じる妖力に差はなく、全てが実体を持ったフランさん自身のようです。

四人のフランさんが、笑顔を向けながら、最初に放った手刀、弾幕、炎の剣と様々な不可避の手段でボクへと向かって来ます。

正直言ってしまうと、なかなか恐ろしい光景ではあるんですけど……

———虚言『在って無き幻（現）実』

残念ながら、実程度ではボクの幻実は破れませんよ。

幽香さんの時に使用した能力を開放、直撃する瞬間だけボクを『嘘』にして不可避たる攻撃を避けられました。

流石に今の食らっていたら、幽香さんの攻撃同様タダでは済みそうになかったですからねえ……

「あれ、当たったと思ったのにハズれちゃった？」

「ハズれてはいませんよー、当たっていませんかもしれないですけど」

「むー、よくわかんない」

むくれる様に、頬を膨らませて不満を漏らすフランさん。ソレに対してボクは苦笑しながらも特に説明などせず次の手を待ちます。

ボクとしては、この遊びの勝敗はフランさんが負けを認めるもしくは遊びつかれるか、ボクが死ぬ事で決すると思っています。

ボクに死ぬ気がない以上、勝敗はフランさんに如何に早く遊びを終わらせるかという面になるんですが、なかなか骨が折れそうですね。

「さあ、まだまだフランさんの番は続いていますよー？」

「言ったなー！じゃあもっともっと行くんだから！！」

しかし、どうにも妙な感じですね。

フランさんは確かに狂気を持っている……気が触れているようにも見えますし感じます。ですがその反面、その狂気を持っていてもしっかりとした自我があるようにも感じます。

まるで、そうする事で何かを誤魔化すかのような、そうせざるを得ないかのような。

「さっきの四倍だよー！」

狂っているように見せる事で、周りを自分からワザと遠ざけているようです。

そうしないといけないというような強迫観念にも近いナニカ。

或いは、他に何かそうさせるものがフランさんにはあるという事でしょうか？

ボクを感じるこの感覚を信じるならば、一つだけ辿り着ける答えがあります。

それは……

フランさんは狂………ではない

長く生きていればこそ、狂人奇人にだって会う事がありました。

そのいずれにも当てはまらない何かを、フランさんは持っているようです。

しかし前情報が余りにも無さ過ぎる。全ては予測の域を出ず、ボクの推測が事実であるという根拠ありません。

「……うわぁ、なにこれ怖いです」

未だ四人いるフランさんから文字通り隙間無くと言えそうな弾幕が展開されました。

っていうか、分身しても同じ量の弾幕を出せるならそれはもう密度も四倍になりますよねえ……

そんな無駄な思考も織り交ぜながら、フランさんの目をしっかりと見直します。

……やはり、狂気を内包していてもソレに飲まれているようには見えませんよね。

「さて……これも避けきりましたけど。次は何をしてどうします？^{遊び}」「いいもんいいもん、じゃあ絶対避けられないようにしてあげるんだから!!」

「良いでしょう、受けて立ちますよー」

こちらの思考は一切漏らさずに、フザケタ様子を保ちながらフランさんへと笑いかけます。

馬鹿にされたとも思ったのか、フランさんは両手をぶんぶんと振りながら、その内に秘めた狂気の色を強くしました。

そして、最初の一撃を上回る程……それすら生温いと感じる程の脅威を感じて、ボクの尻尾全てが逆立ちしました。

「ぎゅっとして……」

「あ、コレはマズい」

——ドカーン!!

第五尾 どうやら、遊び相手をするようです。（後書き）

時間が足りません、咲夜さんの能力をください。どうも緋月です。

妹様登場の五尾でしたが、途中であえて切りました。

ここからどうしようかなーとか思いつつ、次の更新は緋月の考えるキャラ設定シートのような物を上げようかと思っています。

銀狐の設定だったり、実は○○○な妹様の設定だったり、裏設定（！？）のヒロイン紹介もあるかもしれません。

まあ、ソレも予定で未定であくまで予告なんですけどねー。

どんどん東方の設定がオリジナルというか捏造ご都合主義方向にズレていますが……一尾の前書きで書いた通りに緋月は東方を触り程度でしか理解してないので、細かい所は目を瞑ってそういうモノだと思っただきたいです。

故に幻想郷であって幻想郷らしからぬ東方ワールド、でもちよいちよい小ネタは挟むよ！みたいな感じですよ。

さて、相変わらずな鈍足投稿ですが、まだまだお付き合い頂ければと。

追伸。

累計5000アクセスと、700PV突破しました、見てくださっている皆様に感謝を。

これから頑張りますよー。

第六尾 どうやら、ちょっと死に掛けたようです。（前書き）

今回試験的に視点変更など取り入れてみたり、あまり得意ではない三人称を入れてみたりもしました。

今後も試すかどうかは皆様の反応次第で変えようと思うので、ご意見をお願いします。

第六尾 どうやら、ちょっと死に掛けたようです。

Side Other.

———ポタッポタッ

「……っ、流石に能力を超えて来るとは予想外ですね」

爆発が起き、その爆煙の中から転がり出るように現れる人影があった。

それは銀糸の髪に金糸の耳を持ち、九尾たる尻尾をつけた青年、銀狐であった。

だがしかし、爆発の影響かその左手は辛うじて付いている程度でその他の部分であっても無傷と言える場所は少ない状態だ。

「それでも虚言が間に合ったからコレぐらいで済んだんですが」

———ポタッポタッ

身体中から、決して少なくない血を流しながら銀狐は晴れて行く煙

の先にいる人物を普段の温和さを感じさせない鋭い視線で見つめていた。

そこには、少しばかり驚きの色を見せながらも変わらぬ狂気を見に秘めた少女、フランが銀狐の方を見つめていた。

「わー、コレで壊れないなんて銀狐って丈夫だね！」

「いやまあ、一部はしっかり壊されちゃってますけどね？」

素直に驚きの言葉を銀狐に告げるが、銀狐もまたおどけたように今は動かす事ができない左腕を指差して見せた。

あの時、フランが起こした行動はとてもと言っていいほどシンプルな物だった。

開いた手を握りこむ。

それだけの動作で、銀狐は爆発に晒され左手を失いかける程の怪我を負っていた。

当然ながら、瞬時にその危険性を本能で感じ取った銀狐は、回避するための常套手段である『虚言』を発動した。だが、結果として残ったのはその自分の能力をも超えてその身に牙を剥くフランの能力であった。

「『嘘』ですら防御に使えないなんて、その能力は反則でしょう……なんていう能力です？」

最初こそ痛みがあるかの表情をみせた銀狐であったが、今ではもはやその手がなんでもないというかのようにフランへと問い掛けていた。

そんな様子に、若干の疑問を抱きつつソレを気にしない事にしたフランもまた銀狐の問いに答えた。

「『ありとあらゆるモノを破壊する程度の能力』だよ！」

「ああ……なるほど、それなら納得するしかありませんか」

文字通り、ありとあらゆるモノを破壊できる能力であるならば、銀狐が作り出した『嘘』という概念ですら破壊する事は難しくないだろう。故にその能力は防御を超え傷を負わせたとと言える。

攻撃はせず防御は許されず相手の理不尽とも言える能力をあわせた攻撃を避けなくてはならない、普段であれば絶体絶命であるその状況。

「ああ、これは困りました。ますますもってやり辛い相手ですねえ……」

だが、そんな状況であるにも関わらず銀狐は笑って見せた。左腕を破壊し、全身に傷を負わせた相手であるフランを見て、僅かな殺意すら抱いていない慈しむような微笑みを。

よほどの馬鹿か聖人君子でもない限り、ここまでダメージを負わせた相手にこのような笑みを見せることはできないだろう。

「まあ、見せて頂いて生きているのですから十分ですか」

「ホントに銀狐は頑丈だね！　これを耐えたのはお姉さまくらいしかいないのにつ！！」

「頑丈と、言えるかどうかは解りませんが……まあ、生きてる事を耐えたと判断できなくもありませんか」

動かない左腕に困った視線を向けた銀狐だが、動かないモノは仕方が無いとばかりにすぐに視線を外すとフランへと視線を送った。その瞳には如実にされど言外に挑戦的な色を滲ませていた。

「それで、フランさんの攻撃はこれで打ち止めですか？」

「スペルカード自体はもう無いけど、まだまだ手段はあるよ！」

———これを耐え切ったら、銀狐の勝ちにしてあげるっ！

そう高らかに宣言したフランは、つい先程使用していたと思われる同じモノを四人に増えたフラン達が一糸乱れぬ動きで放ってきている。

一瞬疲労のせいで身体に力が入りきらなかった銀狐は初動が遅れてしまった。

その間に、四人いる全てのフランが手の平を開き、一気に握り締めるモーションを始めた。

『ぎゅっとして……ドカーン！』

「これは、洒落に……ならないですよっ！！」

――――反転『覆される確定事項』

そして、確実に銀狐の命を刈り取ると思われた死の一撃は無情にも放たれ、先程とは比べ物にならないほどの爆発に地下空間は包まれる事になった。

だが、その爆発を見たとしてもフランは漠然とした、しかし小さな小さな予感を感じていた。それは……自分が負けたという本来なら感じるはずのない予感。

「うはー……流石のボクも喰らってたら死んでましたねえ……」

自分の周囲を取り巻く煙を邪魔だと言わんばかりに払って、爆心地であつたはずの中心から銀狐は呆れた表情をしながら出てきた。服や髪には多少の煤が付いてはいるものの、それ以外に攻撃を喰らつた影響などはまったく見受けられない。

どちらも満身創痍とは言えないがフランは先程宣言していた通り、理屈は判らないが銀狐が生きて戻ってきた為に分身体を消して、ふわりと浮きながら銀狐の方へと近づいて行った。

「あれ……でもさっきと同じで手ごたえはあつたのに……」

「ええ、別に隠すことでもないですし……簡単に言えば一回死にましたよ、ボクは」

間近に来たフランに対して、警戒する素振りすら見せずに銀狐は問われた事に対して答えた。だが、明らかに銀狐は生きており、生き返つたような素振りすら見せていない事にフランは首を傾げていた。その先程まで感じていた狂気が微塵も見えない様子に、銀狐は苦笑いをしながら種明かしをする道化のように答え始めた。

「まあ、ボク 능력の一つである狀況が慣れる程度の能力の応用所でですか」

詰まる所かなり理不尽にはなるが、銀狐は死に至るほどの攻撃を喰らったが、喰らったとしてもなんら影響が出ないという状況を生み出し、結果としてその状況が正しい物とセカイに誤認させてしまったのだ。

セカイに共通して普く存在する『死』という概念を、化かして見せたという。

「普通に喰らっていたら、間違いなく今頃天国地獄のお世話になってたでしょうねえ……ああ、幻想郷の場合は冥界ですか？」

「んー、よくわかんない」

「ははは、遊び相手がそういうモノだったと思ってしまうのが一番簡単ですよ」

銀狐が言うには、これは万能もまた万能な能力ではなく、寿命や天命といったその存在の限界は騙す事はできないらしい。だが、その反面人為的、または他の要因による死に関してはある程度の許容性を見せてくれるそうだ。

平たく言ってしまうえば、自分が納得した……納得せざるを得ない『死』以外で銀狐を殺す事はできないと言っても過言ではないだろう。

「さて、良いいだけ攻撃というか遊び相手に付き合った訳ですし、今度はお話とお話でもしましょうか？」

「お話？」

これ以上鬩いが混ざるのはゴメンだとばかりに、銀狐は尻尾を数回振りながら風を起こし、自分の周囲の地面にあった瓦礫や残骸、埃

を吹き飛ばして座りやすい空間を作り出して胡坐をかいた。

そして自分の前に座るように促し、ちよこんとフランが座ったのを確認してから先程まで違和感として感じていたモノを切り出した。

「ええ、例えば……フランさんが狂った振りをしてる理由とか？」
「……………」

目を細めながら、しかし嘘偽りは認めないという意味を込めてフランを見つめる。

すると一瞬、フランは動きを硬くしたが瞬きする間には惚ける様な表情を見せた。

その表情を見て銀狐は自分の違和感が確信を付いているのだと考えながらも、微塵も表には出さずフランから話し出すのを待つ長期戦の構えを見せた。

そんな姿を感じ取ったのか諦めたのか、フランはため息を小さく吐き出すとポツリポツリと語り始めた。

————それは、幸せに暮らせるはずだった吸血鬼の姉妹の半生。

「なるほど……二人とも強力な種族であり、強力な能力を持っていた為の排斥ですか……」

最初はスカーレット姉妹も今現在のような力はなく、人間に紛れて生活していた時期があったという。だが、それも長くは続かず、種族的な問題で暮らしていた場所で正体がバレ、排斥の目にあったという。

そして、その時の怒りからか先に能力に目覚めた姉と、少し遅れて目覚めた妹。

どちらも強力な能力であったため、最初こそ復讐として村々を襲い相手にならない事を知らしめ、必要以上に干渉させないようにしていたという。

「うん、最初はお姉さまもフランを気遣ってくれてたんだけど……」

だが、そんな生活が何年も続けば人でなくとも、この見た目幼き少女たちには酷過ぎる時間だったのだろう。次第に抵抗を強める周囲へ、妹を守りながらも弱音を見せない姉。

歪な環境は、ゆっくりとではあるが姉の心に負担を強いていった。そんな姉を見続けた妹は、ある日一つの決意をする。

「だから、お姉さまには自分と自分の安全だけを考えて欲しかったの」

自分が、この歪さに耐えかねて狂った事にしてしまおうと。

心が痛かったが、狂った振りをしている間は姉であろうと攻撃を仕掛ける事もした。

そうする事で、姉は妹を守るではなく、自分を護る為だけに動いてくれるだろうと考えて。

「後先考えない、無謀な策にしか見えませんが……一応の効果はあったんですかね」

将来的に、姉との仲を回復させるのであれば愚策としか言えないだろう。

いくら本人としては振りだとしても、他人から見れば本当か嘘かなんていうのは判らない。

それこそ白黒はっきり相手の心がわかるような能力でもない限りは、実は演技でしたと言われても可能性というものを考えてしまう。

「狂った私が使う能力の凶悪さは、銀狐も身に染みて感じたでしょう？ それと同じで、人は私たちに関わる事を止めて……お姉さまも私を閉じ込めることで平穏を手に入れたの」

「フランさんに取って、それが仮初めの平穏と知っていてもですか？」

まるで苦虫をかみ締めるような表情を見せる銀狐の問い。

それを問われてなお、フランは自分の起こした結果と行動について後悔はしていないと言うかのような儂い笑顔を見せた。

「うん……あのままお姉さまが壊れるよりずっといい。それに今のお姉さまの周りには咲夜やパチェリーがいるから」

ソレは、今にも泣きそうな少女の顔でしかなかった。

自分も姉の傍にいたいであろうハズなのに、その心押し殺して狂った振りを続ける孤独な少女。

フランは確かに、不幸な少女であっただろう。

少なからず今この時までは万人が見て間違いなくそうであつたと答える状況であつた。

そう、この時までは。

――
そうは問屋が卸さない
――

S i d e 銀狐

ボクはフランさんの独白を聞いていた今までの表情が嘘であるかのように不敵な笑みを浮かべている事でしょう。まあ、実際しているつもりなんで紫さんには及びませんが大層胡散臭い表情をしている自信はあります。

そんなボクの変化に、一瞬虚を突かれたような表情を見せるフランさんを尻目に、自慢の尻尾の二本に妖力を纏わせると何かを押し開くかのようにして動かししました。

「と、言うことらしいんですけど。ここまで解りやすく健気な妹さんに何か一言どうぞ」

実は、先程尻尾で場所を作った時に見えるか見えないかの薄く細いスキマを作ってあったりしました。流石にあの後も戦闘があったら維持するのは難しかったでしょうが、フランさんは素直にボクの言うとおりに座って頂けたので此方としても大した労力は使いませんでした。

「……お、お姉さま」

ボクが展開したスキマの先には、フランさんと会う前までボクが案内されていたレミリアさんの部屋が広がっていました。薄くスキマを作って繋げる事で、離れた位置にいる方に声を聞かせる拡声器の役割をさせて見たんです。始めは出来るでしょうかと思いましたが、やってみるとなんとかなるもんですねえ。

「さて、後の話し合いは存分に当人たちでどうぞ。ボクとしては一度休ませて頂きたいのが本音なので」

此処数千年使っていなかった能力を、幻想郷に来てからは何故か連続と言っている位に使っている気がします。別に妖力量とかが足りないとかではないんですが、精神的なモノは結構使った気がします。なんせ能力の使用の大半は命に関わることでしたからね……

「十六夜さん、申し訳ないんですが何か飲む物を頂いても？」

「え、ええ……解りました、ご用意いたします」

よっこら言いながら自分でも爺臭いなーと思いながらも立ち上がった、スキマを抜けて部屋を渡り、未だ何故か黙っているレミリアさんをフランさんの方の部屋をと押し付けてボクはスキマを閉めました。

最後まで関わっても構わないんですが、こういうのは当人たちの問題であって第三者であるボクが首を突っ込むべきではないでしょう。

「頼まれてた事は、たぶんこれで解決しますよ？」

「……ありがとうございます」

ボクとしては関わろうが関わるまいがどっちでも良かったんですが、フランさんに会う前に十六夜さんからお願いされてしまいましたしね。

なら、このおせっかいな天狐のボクとしては、何かをしてあげたいと思っちゃったんですねー。最後の最後で問題を丸投げしたような気がしないでもないですが、ここまでお膳立てしてしまえば後は姉妹仲を信じておけばいいでしょう。

どちらも姉妹を思いやる気持ちはあったみたいですから。

「ま、後はお二方が戻ってくるまでのんびりと過ごさせて頂きますよう」

どうやら十六夜さんも二人の様子は気になっているようですが、能

力を使わず見に行かない所を見ると、ボクの方の相手をしていただけるようです。

そうでなければ、能力を使いすぎまあちらの方に向かっていてしょうから。

まあ、この部屋に一人放置されても間をもてあますのは目に見えてるので助かりますが。

「……それにしてもよく妹様の攻撃で生きていましたね」

「フランさんにも言いましたけど、実際一度死んでるようなもんですけどねー」

ありとあらゆるモノを破壊する程度の能力、正直に言えばもう二度と喰らいたくありません。今回は相手が目の前にいて、挙動がある程度掴めたからこそ後の先を取ることができましたが、見えない位置からフランさんにあの能力を使用した日には、気付かないうちに冥界コースですよ。

それだけ、防御という概念が意味を成さず、不可避に近い能力なんですから。

「幸運なことにボクには対処する方法が数個あったので、なんとかまりましたけどね」

「……幸運っていう問題じゃないような気がしますけど」

「ははは、生きていれば全て幸運で、死ねばそこが不運ですよ?」

ボクの物言いに呆れたような表情を見せる十六夜さんに苦笑して見せながら、いつの間にか用意されていたお茶菓子と共に用意してい

ただいた紅茶に舌鼓を打つことにしました。
流石に今日はもうこれ以上、戦闘に巻き込まれるなんてこともない
でしょうしね。

「ああ、のんびりできるって素晴らしいです……」

第六尾 どうやら、ちょっと死に掛けたようです。（後書き）

正直、戦闘描写は苦手というかいまいち妄想し辛いのであまり得手としてません。

これが精一杯なんですごめんなさい、といいつつ第六尾をお贈りいたしました。

数ある先達の方々の作品で大抵フランは狂気に染まっていたり、ガチンコでOHANASHIして解決したりしてますが、緋月はこういった路線で行かせて頂きました。

これで完全に東方亜流なお話が展開されていきそうですねー、困った困った。

っていうより紅魔館組の話が長くなってビックリ困ったって感じもあります。

まあ、ソレはソレコレはこれの精神で行きましょう、細かいこと考えてもしょーがないんですよ。

ちよっただけシリアス入れたので、次からはまた真面目に不真面目な銀狐で行きたいと思います。

それでは、また次の尻尾でお会いしましょう。

第七尾 どうやら、昔話をしたようです。(前書き)

前もってアンケート代わりにご意見募集させていただきます。

銀狐の住処ですが、場所がどこがいいかなあと思ひまして。

スキマのどこか、紅魔館に混ぜるか、妖怪の山近隣か、永遠亭にしてやろうか、はたまた人里か。

大穴でアリスとかでもイケルか?とか考へてるのですが、何処でもイケルっちゃイケルので此処が良いーとかあったら教えてください。

第七尾 どうやら、昔話をしたようです。

結論としては、レミリアさんとフランさんは仲良し姉妹になったようです。

勝手に移動させておいてスキマを閉じたボクが言うのもなんですが、二人はわざわざ一緒に戻ってきて、ボクに仲直り宣言をしてくれました。

二人の手がしっかりと握られているのを見た以上、ボクからはおめでとなくらいしか言う事が無かったんですけどね。

「所で、いつの間にかいらっしやる紫帽子のお嬢さんはどなたですか？」

なんというか、幻想郷ってボクの気付かない内に人が増えてるんですよね。

いやまあ、周囲に注意を向けていないのが悪いとも言えるかもしれませんが、別に命の危険を感じている訳でもないのです。そこまで敏感になる必要もないですし？

ああ、これじゃあタダの言い訳に聞こえちゃいますね。実際そんなんですけど。

「あら、パチエ。出てきて大丈夫なの？」

「ええ、今日はまだ調子がいいし……どうやら珍しいお客さんも来てるみたいじゃない」

何故かボクに向けて珍しいというかそんな物を見たという表情でこちらを見るお嬢さん。

正直、そんな視線を向けられる理由が特に思いつかないんですけど、一体どういうことでしょうか。

若干ですが、好奇というよりはなんと言いますか、幻でも見たかのような表情に近い気がするんですけど。

「伝説か何かだと思ってたけど、本当に存在してたのね……」

「どういう意味かしら、パチェ」

その探るような視線を隠すことなく、無遠慮にボクの方を見てきていますけど……

伝説だの存在だの、なにやら良く解らない事を言われると流石にこちらとしても反応に困るんですけど。

「あのー？」

「『悠久を化かす銀狐』って貴方の事でしょうか？」

はて、なんですかそれ初耳なんですけど。

ボクのことでしょうといわれても、そう言われた事なんてないですしそもそも始めて聞きましたけど……ん、初めて？

本当に初耳なんでしょうか……？

「個人的には初耳と言いたいですけど……なんででしょう、どっ

かで聞いたような気がしますね」

「幻想郷縁起とか、稗田という名に聞き覚えは？」

稗田……ああ、あの転生一族の方ですか。

はるか昔に稗田阿一って方に会ってなにやらいろいろ聞かれた記憶がありますね。その時は周りに特に無関心だったので聞かれるがままに答えてたような気がします。

そういえば一生懸命何かを書いていましたが、もしかして幻想郷縁起ってソレなんでしょうか？

「へえ……パチエ、その本って今どこにあるの？」

「小悪魔に言えば図書館から出てくるはずよ」

「咲夜」

「はい、お嬢様」

興味でも沸いたのか、レミリアさんが咲夜さんに一声かけると、すぐさま返事を返していなくなりました。また能力でも使って図書館とやらに向かったんでしょうか。

とりあえず、自己紹介がまだなのでこの目の前で未だボクを見ているお嬢さんをどうしたもんでしょうか……

「……………」

「……………」

「……なにを二人して見合ってるのよ」

いやあ、見られたらついつい見ちゃいませんか？しかもジッと見られてるので、こっちとしても会った視線を外すには気まずいですし。かといってボクから何か話題を振れるほど仲がいい訳でもないですからね、むしろ初対面というしかないんですから。

「えーっと、改めまして。諸事情により幻想郷を漫遊している銀狐と申します」

何も言わず視線のみ送ってくるこの空気に耐えかねて、ボクは簡単な自己紹介と一緒に軽く頭を下げました。結果として視線を外す事になりますけど、ただ外すよりはこうした方が心証も悪くないと思うんですよね。

「そういえば、自己紹介をしてなかったわね。パチエリー・ノーレツジ、魔法使いよ」

何でも、彼女は『火水木金土日月を操る程度の能力』を持つ魔女らしいです。補足代わりにレミリアさんが教えてくれたのは、動く大図書館と言われる程の知識を持っているがあまり図書館から出てくる事はないとのこと。今回みたいに出てくるのは稀なんだそうです。ボクなんかを見るためだけに出てくるっていうのは、それはそれで何か申し訳ないような気がします……

「悠久を生きたというその記憶、いろいろ聞かせて貰えないかしら？」

「あ、フランも銀狐の話聞きたい！」
「面白そうね、話さない」

どうやら、目的は彼女たちが生まれる前の時代の事らしいです。
まあ、長生きしてますから彼女たちが知らない時代も多少は覚えて
いますけど、果たしてそれをちゃんと言葉として伝えられるんでは
ようか……？

まあ、戦いに巻き込まれるよりは全然平和なんで、たどたどしい言
葉ですけど少しだけ昔語りを試してみましようか。

そうですね、興味を引いていただけそうな話といえば……諏訪大戦
あたりの話でもしましようか。

———
なにわともあれ
———

「さて、長くなってしまったのでそろそろお暇します」

フランさんが色々と話をして欲しいと頼んでくるので、ボクも覚えていた限りの昔話をちよつとだけお芝居風に仕立てて話していました。

どうやら気に入って頂けたようで、フランさんは言わずともレミリアさんやパチェリーさんも楽しそうに聞いていました。

咲夜さんは、話を聞きつつも絶妙なタイミングでお茶やお茶菓子を用意してくれました。

いやあ、凄いですよねえあの能力。用意するまでの時間がほとんどあってないような物なんですから。

「銀狐、行っちゃうの？」

「ええまあ、まだ幻想郷に住居も構えていませんし、できれば今日中に場所くらいは決めておきたいので」

途中で話をしながら気付きましたが、ボクは幻想郷に住居を持っていません。

それも当然の話で、昔立ち寄った時には普通に野宿状態でしたし特にそういうのにこだわってもいませんでしたから気にもなりませんでした。

でも、さすがに意識して腰をすえるのであれば、自分の住処というのは重要になってきます。出来れば襲われることの無いようにどこか安全な場所を見つけるのが理想です。

「今日くらいなら、此処に泊まって行くのも許すわよ？」

「流石にそれは、ありがたい申し出ではありますが遠慮しておきます」

レミリアさんやフランさんはむしろ嬉々として泊まっていけと提案してくれませんが、ソレに甘えるのも申し訳ないですし、まだ時間はあるのでもう少し行ける所には行っておきたいという気持ちもあります。

たった数箇所ですが、それだけでこんなに多様な方と出会えたんですから、次に行く場所でもきっと面白い出会いがありそうですからね。

「むー……また遊びに来てくれる？」

出しゃばなしの九尾に埋もれるように、少しだけ不貞腐れた表情をしたフランさんが見上げるように聞いてきます。いつの間にやら、フランさんのお気に入りにはボクの九尾が入っているようで、隙あらば潜り込んで来るのでちょっとだけくすぐったいです。

「はい、皆さんが宜しければまた立ち寄らせていただきたいと思います」

これから幻想郷で暮らす事になるんですから、知り合いが多いのは嬉しいです。

今のところボクが会った方と言えば、紫さんにご同輩の藍さん、太陽の畑の幽香さん、そしてこの紅魔館の皆さんくらいしかいません

から。

尤も、これからまた漫遊する事でお知り合いになる方もいるでしょうけれども、それだからといって、紅魔館の方々と疎遠になるというのも可笑しな話ですよ。

「そうね……美鈴には言っておくからいつでも来たい時に来なさい、その方がフランも喜ぶしまた銀狐の話は聞きたいわ」

「お嬢様もそう仰ってくださいますし、来て頂ければお持て成しさせていただきます」

主従なお二人から許可も頂きましたし、ボクの住処が決まってからでもまた訪ねさせてもらいましょう。まだこの紅魔館にあるパチエリーさんの図書館というのも見えていませんから。

なんで今じゃないのかと言ってしまえば、一度に見てしまうのって何かもったいないと思いませんか？

「今度来た時に、図書館にもいらっしゃい。私は大体そこに居るから」

「ちゃんと来た時にはフランに会ってくれないとダメなんだからね」

まだまだボクの話が聞き足りないと言った様子のパチエリーさんと、尻尾の中からフランさんも歓迎してくれる意思を見せてくれました。なんといいますか、久しく感じてなかった嬉しい感情っていうモノでしょうか。

ボクになってから出会う人はいい方が多くて嬉しいですねえ……

「はい、是非その時はまたお邪魔させていただきます」

尻尾の中からフランさんを取り出し、立ち上がって一礼しながら能力を使ってスキマを足元に作り出すと、落ちるように身体を滑り込ませました。

変わっていく視界の中、フランさんが目一杯手を振りながらちよつと寂しそうなでも決して暗くない笑顔を見せてくれました。ああ、なんでしょうか。なんとなく妹がボクにも出来たような気分ですね。

「いつでもいらっしやい、紅魔館の主として歓迎するわ」

「ええ、またお会いしましょう」

完全にスキマに入る直前、レミリアさんが出会った当初のような威厳を見せて小さく微笑みながら僅かに手を振ってくれました。それにボクなりの笑顔を返しながら、完全にスキマへと入り込みそしてすぐに間を置くことなく違う景色がボクの前へと広がりました。

「……はてさて、次はどこでしょう」

今回はスキマからはじき出される事がなく、入った時の逆再生の状態で足からしっかりと地面へと着地します。なんていうか、このスキマは移動の度に出てき方が変わるような妙な予感がします。さすがに無駄な高高度から出現なんて事は今のところ無さそうだからい

いですけどね。

「えーっと此処は、山……の前といったところですか」

目の前に広がるのは木々が生い茂る山の目の前でした。この山にも見覚えがありますし、なんというか妖力が大量に感じられますね。ついでに記憶の中にあるような力も何個かあるように思いますが……まあ、ソレはソレコレはコレと言う事で細かい事は考えず、さくさく行きましょうか。

「とりあえず、頂上でも目指すとしてもしましょう」

空を飛んでも良いのですが、ここまでの森林は久々に見たような気がするので、上から見るとよりまず実感しようと思いついて上る事にしました。

ただまあ、今までの感じからすると、今回もまた普通に歩いているだけのつもりが、何かしら巻き込まれるというか、厄介ごとが舞い込んでくるような気がしますけどね。

「成る様に成り、故に成る様にしか成らぬ……って所ですかねー」

第八尾 どうやら旧友との再会のようです。

「その妖怪！止まれ！！」

はて、どうしてこうなったんでしょうか？

ボクはただ、目の前にある山をのんびりと登っていただけのはずなんですが……

気が付けば、周りには羽の生えた恐らく天狗であろう人たちに囲まれていて、さらにはその中でも隊長格なのかどうか、一際可愛らしい天狗な方が剣の切っ先をボクに向けています。

「えーっと、とりあえずボクとしては抵抗する意思とかは毛頭ないので、その物騒な物はしまつて頂けると助かるんですけどー」

「黙れ、此処が妖怪の山と知らない妖怪はいない！その中で登ってくる貴様がタダの妖怪のほずがないだろう！」

なんというか、ボクとしては本気で言っているんですが、どうやら目の前の天狗達は妙にいらだっているというか、話を聞く気が全然感じられないんですよね。

それにしても、妖怪の山……ですか。まんまといえはそのまんまの名前ですねえ……

「とは言われても、ボクはつい最近改めて此処に来たばかりなんですが……」

「妖怪が今更幻想郷入りするだと……それこそとんだホラだな」

曰く、妖怪の賢者はそう言った情報を何も妖怪の山側に出してきていない……だそうです。

紫さんはどうやら、この幻想郷の管理者としてある程度の対応はしているらしいです。でも、何故か今回はボクの情報は一切ここに届いていない。

詰まる所、ボクは新参を語った不審な妖怪ということなのでしょう。

「……それにしても、前にはこんな山とか天狗達は居ませんでしたよね？」
あなたたち

「何を言っている、昔より此処は我等天狗と鬼が治める山だ」

天狗に覚えがない訳じゃないですが、どうにもボクが知っている天狗とは羽の色が違うというか……あの人はもっと真っ黒で大きな羽を持っていたと思いますし……

っていうか、あの人は今も相変わらずの高笑いでもしているんですよか。

笑いながら羽扇で攻撃してくる癖だけは頂けなかったですけど、性格は快活で話の乗りもいい方だったんですが。

「……ん、鬼ですか？」

鬼と言えども真っ直ぐで、悪く言ってしまうえば猪突猛進、刹那主義だったと思うんですけど……この山をざっと感覚で視ても、鬼がいるようには感じられません。

動物的感として言わせて貰えば、すぐ近くに居るけど凄く遠くにいるような、そんな曖昧さがあるんですね……

そういえば天魔と会った時に、そんなような能力を持った酔っ払いおにがいたような気がします。

「まあ、覚えてないのは思い出す必要がないか、思い出さたくないかのどちらかですから追々解るでしょう」

「そうか……って、あ、コラ。勝手に自己解決して先に行こうとするんじゃない!!」

先に進めば解るでしょうと開き直りつつ、さりげなく天狗達の間を抜けようとしたが、意外にもすぐに気付かれて一人の天狗に回りこまれてしまいました。

そして少し遅れるように、回りの天狗達も慌ててボクを囲みます。今度は逃がさないためか、四方と上方が抑えられてしまいましたねえ……

「うーん、ちょっと見て帰るつもりだったんですが……」

「訳のワカラナイ妖怪に、そう気軽に我等の住処を荒らされてたまるか」

失礼な、ダレが荒らすんですかダレが。

ボクはタダのしがない観光に來た空狐だっていうのに……

無然としてしまった態度が伝わってしまったのか、いち早く気付いた天狗の子が、その手に持った剣を再び向けてきました。

今度は威嚇ではなく本気なのか、その切っ先と視線に迷いは感じられず、一步でも不審な動きをしたものならば、斬りかかって来るのは間違いないでしょうね。

「素直に下るならば良し、他なれば……」

とは言われても、下ろうにも周りが囲まれてるので、動きようがないんですが。

これはつまりアレですか……見敵必殺、進んでも下がってもダメって事ですか。

別に事を荒立てるつもりはなかったんですけど、どうやら相手側が熱を帯びてしまったようですし……ここは大人しく狐に化かされて頂いて、再度日を改めるべきでしょうか。

紫さんの名前が出てきたあたり、頼めば話を通してくれなくもなさそうですし……どちらかというと、紫さんがというより藍さんがですが。

「止めときな、お前たちじゃドンだけ束になってもその狐には勝てないよ」

そう考えて、化かしの妖術でも使おうかと思っていた時に、突如ボクの近くで妖力が密を増して来ました。それは徐々に形を作って行くくと、二本の角を持ち、腕や腰に錘をつけた小さな鬼の姿へと変化したようです。

……何故曖昧な感じで言ったかというと、まあこれにも理由はあるまして。

「やあ銀狐。久々だねえ、元気してたかい？」

「ええ、此方は変わりなく、そちらも相変わら^ずの元氣酔っ払いそうですね」

何故かボクの上に肩車状態で記憶にあった鬼が現れたからです。

さすがに大体把握は出来ますけど、見てもいない物を断言する程ボクは適当じゃありませんから。

まあ、微かに香る彼女が持っていた酒の匂いと同じでしたし、そもそも上から身を丸め覗き込んできた赤ら顔を見たらすぐに思い出しましたが……

「あははは、銀狐。相変わらずあたしらに対しては遠慮がないねえ！元氣とか言いながら、言葉の外に酔っ払いつけてるだろ！！」
「その状態が酔っ払い以外のなんだっていうんですか」

——伊吹萃香

見た目は子供で、でも齡數千年を生きた鬼。

体格に見合わない振れた大きな角を持ち、その腰にぶら下げた伊吹瓢から常に酒を飲んでいる中毒者よっぽらい、大昔ちょっとした事情により知り合いとなった鬼。

「それにしても萃香、周りの妖力に少し覚えがあると思えばやはり君でしたか」

顔を見て満足したのか、萃香は肩車の状態に戻ると、またしても伊吹瓢から酒を飲み始めました。

……とりあえず、ボクの上で酒盛りは止めて欲しいんですけどね。零れてこないならまだいいですけど、たまに萃香はお酒を零しますから……

「あははは、あれから何千年も経つって言うのに変わらないねえ、銀狐」

「それは此方としても同じことですが……何故君は毎回ボクの上に現れるんです？」

それにしても彼女は、何故か毎回登場する時はボクの上に現れます。しかも明らかに狙って肩車の状態になるようにですが。

まあ、こちらとしても萃香は特に重くは感じませんし、そうしているのもまた彼女らしいかと思って放置していると云ってしまえばそれまでなんです。

「……………」

「ああ、まだいたのかい。言っただろ椀、あんた達白狼天狗じゃどんだけ集っても銀狐には敵わないよ」

何を持って断言しているのかわかりませんが、萃香はボクの上に乗ったまま周りにいる天狗達……白狼天狗というらしいですが、その人たちに声をかけていました。

現状で、ボクっていてもいなくてもあんまり変わらない存在になっていませんか。まあ、何やら萃香が変わりに説明のような事をしてくれるみたいなんで得に口を挟む気もありませんが。

ただ、萃香。真面目な事を言いながらボクの耳を触るのは止めてください、微妙にくすぐったいです。

「ですが……私たちの役目は……」

「ああ、もう。それがあんた達の仕事だったのは解ってるから、さつさと天魔をよんどいで。その方が何倍も手っ取り早いし、あんたらも怒られなくて済むよ」

「はあ……解りました、ですが私だけは監視の意味も含めて貴方達に同行させていただきますよ？」

鬼と天狗だと、力関係はどうやら鬼に天秤が傾くようです。

特に問答をしたと言う訳でもないのに、樫さんと呼ばれた白狼天狗が折れると、周りの天狗に指示を出して、すぐにこの場にいるのはボク達三人だけになりました。

「それにしても……萃香さんがそこまで気軽に接している男妖怪は珍しいですね……」

とりあえず妨害される事もなくなったので、改めてボクは山登りを再開しようと足を進めると、先の言葉どおりなのか、一人残った白狼天狗も一緒について来ているようです。

しかも、ボクとではなくその上の萃香と話を始めてしまいました。うーん……まあいいですか、とりあえず騒動は起きないようですし、

暫くは好きにしてもらいましょう。

「そりゃあ、あたしも鬼とは言え女だからね、弱い男には興味はないよ」

「……と言う事は、その妖怪は……まさか」

「間違いなく、私より強いよ。ねえ、『悠久を化かす銀狐』？」

ニヤリと笑いながら、再び身体を丸めて顔を覗き込んでくる萃香。……なんか悪巧みしていますって言う顔をしながらこっちを見ないでください、嫌な予感しかしないんですけど。

「……君まで、そんな妙な名前でボクを呼ぶんですか」

「いやいや、結構有名だよー特に人里とこの妖怪の山ではね？」

「はて、ボクはここで何かしましたかね？」

と、いうかこの山に來た記憶がないのに、なんで有名になるんですかね？

あえて言うなら萃香達一部の鬼と、あとは天魔っていう天狗が知り合いに居たくらいなんですけど……

ついでに言えば、その時は暴れた記憶も特にはないですし……

「相変わらず、自分が仕出かした事の重大さに気付いてないって感じだねえ……」

「気付いてないというよりも、ワカラナイというのが間違いないと思います」

「まあ、銀狐が天魔と知り合いってだけでも、他の連中からしたら驚きだろうけどね」

「そうなんですか？　そういえば、先程の天狗達に何か言ってたか、確か天魔を呼んで来いとか？」

「——っ!？」

気兼ねなく飲める酒飲み友達というような感じしか持っていないませんでしたけど……

というか、ボクが天魔の名前を呼んだ瞬間、後ろについて来ていた白狼天狗から驚いたような、そんな感じの息を飲む声が聞こえた気がするんですが。

ソレと同時に、萃香が何故かボクの上で大爆笑を始めますし……乗るのはいいですが、あんまり動かないでくださいよ。落ちないでしようけど落ちたら危ないんですから。

「どうかしましたか、白狼天狗さん？」

「いえ……ただその、天魔様を呼び捨てにしたように聞こえたもので……」

「ええまあ……別に友人を様付けして呼ぶのも変でしょう？」

此方としては真面目に聞いているつもりなんですけど、何やら上の萃香の笑いが大きくなっただけの気がします。なんでしょうか、こうも笑われると別にどうでもいいですがイラッと来ますね。

と、言うわけでちよつとだけお仕置きです。

「萃香」

「ん？　ああ、相変わらずいい毛並みしてるねえ」

傲慢の尻尾の一本を使って、まず萃香の首に巻きつけます。
そして、何やら萃香が言っているのを無視しつつ、少しでも妖力を
籠めて……

「てい！」

「わあ！？」

そのまま、後ろに向かって放り投げてやりました。

まあ、この程度で怪我するような柔な種族じゃないですからね、萃
香たち鬼は。

予想通り驚きはしたでしょうが、特に問題なく空中で体制を整えて
着地していますし。

「あつぶないじゃないのさ！」

「人の上で爆笑し過ぎです、それくらいは理解して反省してください
い」

「むー……まあ、笑ったのは悪かったよ。でも放り投げる事はない
じゃないのさ」

ブツブツ言いながらも、何故かまたボクの上に登って来ました。よ
っぽど、肩車が気に入っているんでしょうか。まあ、一回制裁は加
えたのでこれ以上手を出す気は今のところはありませんが。

「で、先程より呆然としてますが、大丈夫ですかね？」

「あ、いえ……失礼しました。萃香さんにそんな事が出来る人がいるとは思ってなくて……」

「まあ、当分先は銀狐くらいしかあたしをこんな風に扱う奴はでないだろうねえ」

動くのがめんどろだったので、尻尾を白狼天狗の前でぶらぶらさせると、完全復帰はしていないようですが、若干眩くような信じられない物を見たというような感じで言われてしまいました。

実際多少は雑に扱っている事に関しては否定しませんが、それでどうなるような相手でもないです。そもそも萃香に遠慮するだけ無駄ですから、逆にこっちがいらぬ苦労を背負うのは目に見えています。

「ああ……そういえば白狼天狗さん。改めまして、銀狐と言います。長くなるかはわかりませんがよろしく」

「あ、失礼しました。私は白狼天狗、哨戒部隊の犬走いぬばしり 椛もみじといいます。どうぞ椛と呼んでください」

とりあえずの自己紹介を終え、萃香が追加で説明してくれた事によると、白狼天狗というのは、基本的にこの妖怪の山の警備などを担っているらしいです。

そして、椛さんの能力は『千里先まで見通す程度の能力』で、その能力によって突如現れた妖力の所在を掴み、仲間を率いてボクの方まで飛んできたという事です。

「この妖怪の山は、同族や仲間にはそこまで警戒していませんが、正体不明や敵に対しては基本追い返すようにしていますから……」

その一貫で、ボクという正体不明を追い返そうとした所、萃香が現れて今に至ると。

説明してしまえばなんて事はないですが、どうやらそれはこの幻想郷。そう簡単に物事が済む訳じゃないらしいです。

なんでも、白狼天狗は愚か烏天狗ですら特にモノともせず、大天狗と戦えるような強者が人里にはいるとかなんとかいらないとか……どっちでしょうね？

「はー……それにしても、随分とまあめんどくさい体制を取ってますね？」

「そう言ってやらないでよ。天狗達にだって縄張り意識ってもんはあるんだからさ」

別に否定している訳じゃないんですけどね。わざわざ妖怪としては上位に近い天狗達や、最上位にいる鬼にケンカを売するような事をする妖怪なんているんでしょうかね？

……まあ、頭に浮かんだ向日葵の緑髪の妖怪さんは置いときましよう。

あの人なら喜んで山一つくらいならケンカを売りそうですから。

「まあ、それはいいんですけど……そもそも天魔に纏め役なんてできるんですか？」

「それは……その……」

柊さんは口箆ってしまいましたけど、ボクが知る限りの天魔はそういうのにはまったく向いてないと思うんですね。そんな事するくらいなら、力でねじ伏せて言う事を聞かせるとかの方がよっぽど納得できますし……

悪口になってしまうのであんまり言いたくないですが……天魔って見た目は威厳溢れてるかもしれませんが、中身はアレでしょう？

アホの子

「天魔様はその……確かに私たちを護ってくださいますし、天狗の長としては間違いない方ですよ!？」

「柊さんを見る限り、ボクの予想は間違っていないと思うんですけど、その所はどうですかね、萃香」

「んー、ほとんど間違っていないと思うよ？ だって天魔だもんさね」

ですよねえ、天魔が真面目に統治してるとか言われたら、間違いない何処かの誰かの悪戯の可能性を探りますよ。

一生懸命な柊さんには申し訳ないですが、その実際の場を見ない限りは納得できそうにないです。

「相変わらず、失礼なことを言う狐に鬼よのお……」

羽の羽ばたく音と共に、上から数人の烏天狗と白狼天狗を連れた黒い大きな羽を持つ見覚えのある存在が降りてきました。

若干の年月を感じさせる貫禄と言うのでしょうか、そう言った存在感を見せ悠然とした体を崩さない、まさに大天狗という天狗の最上

位。

「久しいですね、天魔。多少老けた以外は変わりないようなによりで僥倖」

「うむ、お主も久しいな銀狐。お前は変わりがないようだがな」

「や、天魔。銀狐がいたからついでに来たよ」

「伊吹の……お主も相変わらずだのお……老けたのはワシだけか」

周りに傳く天狗達を視界に入れつつ、久々に会った旧友に挨拶をすると、天魔はボクらを見た後、小さくため息をついていました。

どうやら、自分だけ見た目が老けてしまったのが納得行かない様子です。

まあ、そればかりは自分でどうにかしていただかなかった自己責任ということ。

「白狼の、ご苦勞だった。コヤツはワシの知り合いに相違ない。お主等も此処でかまわん、自分の任に戻れ」

抑揚に頷いて、天魔がそう言うのと周りにいた白狼、烏天狗たちは各々が飛び立って残ったのは、ボくら旧友組となぜかその場に留まった樫さんだけになりました。

はて、どうして樫さんは残ったんでしょうかね？

「樫、どうしたんだい？ 他のは散ったけどあんただけ残って」

「私は、能力故に借り出されただけで、本来は非番ですから。どうせなので萃香さんを負かすという存在を見てみようかと……」

「ボクは見世物でもないんですけど、まあ別に気にしませんから好きにしてください」

そう言うと、さすがに上司というか長である天魔がいるせいか、多少口を可愛らしく結んで、椀さんは数歩離れた位置からボク達を見ていることにしたようです。

そう望むのであれば、此方としてはとやかく言う気もないので、飽きるまでは好きにしていただいて問題ないでしょう。

「所で天魔、本当に老けましたね？」

「売るさいわい、狐の。ワシかて現場だけならここまで早く老けるつもりも無かったわ」

「天魔の奴、長になってから苦手な書類仕事の真似事させられて一気に老けたのさね」

どうやら、心因性のストレスが原因で見た目が一気に老けてしまったようです。

ボクも萃香も自由気ままな生活をしていたからでしょうか、特に老けた様子もなかったりします。

同族を護る為には、少なからずの苦勞を負わなくちゃならないっていう証明でもありますかね。

「はあ……それで狐の。わざわざ数千年ぶりに現れたかと思えば、なによろかの？」

「理由は、特にないといえませんが……そうですねえ、ついですしこの山にちょうど良さそうな住処なんてないですかね？」

天狗やら梶さんやら、萃香に果ては天魔まで、なにやら色々な方に会うことになりましたが、ボクが紅魔館から出てきたのも元はと言えば住処を探す為でしたし……

天魔がここ、妖怪の山の長だとするのなら、案外いい場所を知っているかもしれませんよね。

彼が真面目に仕事をしていれば……という前提条件が付きますが。

「ボクの希望としては日の光が入るなら立地はそこまでこだわりません」

「そうだのお……おお、そう言えば。白狼の、確か近くに平野状態の場所が無かったかの？」

「は、あの場所ですか……しかしあそこは」

どうやら、ボクの予想を超えて天魔は一族の長としての仕事はしているようです。

昔の彼を知っている以上、彼なら建物から文字通り飛び出すのくらい不思議でもなんでもありませんし。

「何、銀狐であればあの程度特に問題ともせんじやろうて。許可は出しておくでの、狐の、興味があるなら行ってみると良いの。場所はそこの白狼のに案内させよう」

「解りました、長がそう言うのであれば我等白狼天狗、その任に答えましょう」

「うむ、気負わず励め」

「はっ」

さて、住処候補は一体どんな場所なのやら……
ついでに言うとか先程からこの警鐘を鳴らしているボクの頭の中と、
先程感じた悪寒が間違いでありますように……
たぶん無理な感じがヒシヒシと伝わって来ますけどね!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0933u/>

どうやら、色々混じったようです。

2011年10月9日06時10分発行